

資料

# 女生徒の体型と下着の意識

1980(昭和55年)



## はじめに

洋装生活が、日本に定着して30年。今や洋装は、習俗として社会生活の基盤となってまいりました。

この洋装への衣生活の変化は、社会意識・社会生活などにさまざまな影響を与え、大きな社会変化を生み出した一つの要因とも考えられるものです。ことに女性における洋装は、二次成長に始まる、乳房のふくらみやウエストのくびれなど、女らしいからだつきを積極的に位置づけるものであり、女性の地位の向上に果たした役割も多大なものがあると思われま

す。また、女性の洋装生活は、下着が大きなウェイトを占めるのが特徴です。洋装への衣生活の変化は、下着の大きな変革をもたらしたといえます。

中でも、ブラジャーやガードルといった体型補整的発想も持つファンデーションの登場は、日本の歴史になかったものだけに、その与えた影響も大きなものでありました。からだにピッタリとフィットすることが要求されるこれら下着の着用にあたっては、自分のからだを正しく認識することが必要不可欠であり、これに加えて、下着の正確な知識、着用方法のしかたも、知っておかなくてはならないことです。

しかしながら、洋装がここまで習慣化してきたにもかかわらず、女性の二次成長に始まる洋装下着の選択・着用についての知識・認識は、さほど高まっていないというのが現実です。社会道徳として、身だしなみとしてはもちろんのこと、バスト・ヒップ・ウエストなど成長にあった下着の着用は、健全な発育を助けるためにも重要な意味を持っています。

これに加えて、10年に1歳は早くなっているといわれる初潮、食生活の変化にともなう体位の向上など、成長期特有の現象も、年々変化してきている事実があります。この変化に対応した、下着の正しい着用方法の指導が、今、もっとも望まれているといっても過言ではありません。

さて、下着の着用方法についての教育の場として考えられるものに家庭があります。しかし、洋装生活が定着してはまだ30年という歴史を考えると、指導に当る母親ですらその十分な知識を持たない、という現実が多々あることは容易に想像されます(これは、当資料からも読みとれます)。

そう考えてきた場合、学校における下着教育の重要性が再認識されてもよいのではないかと考えます。

当資料は、小・中・高校生など、いわゆるティーンに関するさまざまなデータです。

人間工学研究の立場から、計測した体型特徴。高校生を対象に巾広くアンケート調査を実施した生活、からだ、下着に関する意識調査。これに加えて、282名の、中・高校生の娘を持つ母親についておこなった意識調査もあわせて、記載しております。

皆様方のご参考になり、また各種の指導に際して、ご活用いただければ、幸いに存じます。

## 女性との体型と下着の意識 《目次》

I ティーンの体型調査	1
調査企画の概要	2
調査分析内容の概要	3
〈1〉身体主要部位の年齢別比較	4
〈2〉身体主要部位の増加量	5
〈3〉百分率成長曲線	6
〈4〉肥満度分布	7
〈5〉プロポーション	8
〈6〉乳房のふくらみ状況と初潮	9
〈7〉ティーンと成人との比較	10
〈8〉過去との比較	11
II 生活、からだ、下着の意識・実態調査	12
調査概要	13
調査分析内容の概要	14
〈1〉関心を持っていること	16
〈2〉ボディタイプの意識	17
〈3〉気になるからだの部分	18
〈4〉初潮時の印象	19
〈5〉ブラジャーのつけ始め時期	20
〈6〉ブラジャーのつけ始め理由	21
〈7〉ブラジャー着用をすすめた人	22
〈8〉つけ始めブラジャーのカラー	23
〈9〉ブラジャーのつけ始めの印象	24
〈10〉ブラジャーの着用目的	25
〈11〉ブラジャーの好みのカラー	26
〈12〉母親の下着教育	27
〈13〉学校における下着教育	28
〈14〉下着購入時同伴者	29
〈15〉下着で思いつくもの	30
〈16〉関心のある下着	31
〈17〉下着の所有実態	32
付録 母親調査	37
調査概要	38
調査分析内容の概要	38
〈1〉自由時間における娘の衣生活の規制	39
〈2〉母親の娘に対する下着教育	40
〈3〉母親の受けた下着教育	41
〈4〉下着に関する意見	42
〈5〉生理教育の状況	43
〈6〉母親の情報収集	44

# ① ティーンの体型調査

# 【調査企画の概要】

- 調査対象 10～17才の女子(小学校4年生～高校2年生) 772名

10才	11才	12才	13才	14才	15才	16.17才	TOTAL
50	97	100	207	185	111	22	772名

- 調査地域 首都圏及び京阪神地区居住者

- 調査期間 昭和55年4月～12月

- 調査方法 ①マルチン式計測法(注1)による身体計測(被験者1人当り108ヶ所計測)  
②生体観察(somato scopia)(注2)

注1 マルチン式計測法=世界各国で統一して用いられている人体測定方法。被験者を安静直立の基本姿勢にし、所定の器具を用いて、測定点間の距離や床からの高さ、体周などをはかるもの。

注2 生体観察(somato scopia)=計測値だけでは表現できない人間の体の形態特質を、視察や触察で表わそうとする方法。あらかじめ定められた型、形状、色調などの基準と、観察する対象を比較し、もっとも近い範囲にあたるものに分類していく。

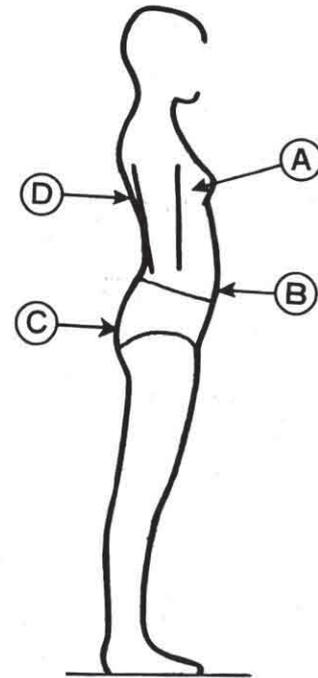
参考① 分析の中で使用している成人のデータは、昭和51～53年調査分。20～29才の成人女子826名を対象にしたものより引用。

参考② 調査は学年別ではなく年齢別におこなっている。例えば、以下でのべる10才とは(9才7カ月から10才6カ月まで)をさす。なお㊸部の調査は学年別におこなっている。

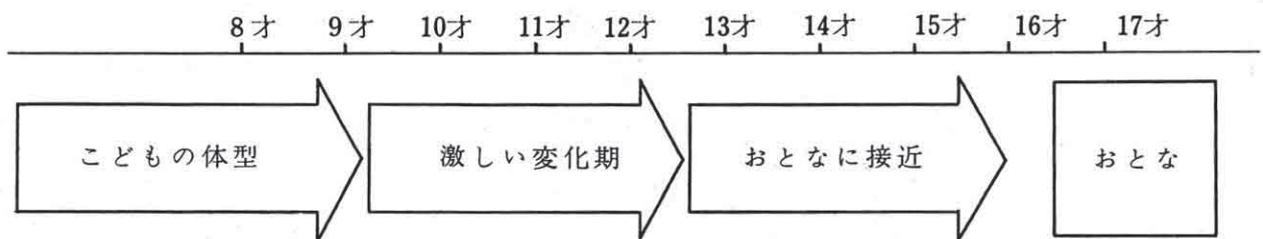
# 【調査分析内容の概要】

## ●ティーンを成人と比較すると

- ①乳房は、10～12才くらいでふくらみ始める。堅くて、移動量が少ないのが特徴。高い位置にある。乳房がふくらみ始めて1～2年後に初潮をむかえるようだ。
- ②おなかのシルエットは、つき出た形。いわゆる幼児腹が多い。
- ③ヒップは高い位置にあり、移動しにくい。バックシルエットはツツ型。
- ④背中カーブは、インカーブ型が多い。これは、そり返った姿勢が多いためであろう。
- ⑤プロポーションは、脚も長く、バスト位置も高い。丸胴で、ウエストのくびれが少ない。



## ●成長という観点から



- ①成長が著しい時期は、10～11才にかけてである。ただし、バストについては、11～12才にかけてがピーク。
- ②女らしいからだつきになるのは、12～13才の間。バストがチェストより大きくなり、ヒップとウエストの差も開いて、ウエストのくびれが目立ち始める。
- ③15才では、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップとも、ほぼ大人のからだつきになる。

## ●過去のティーンと比べて

10年前より体格の向上が著しい。しかし、ズン胴で、ヒョロリとした体型になっている。

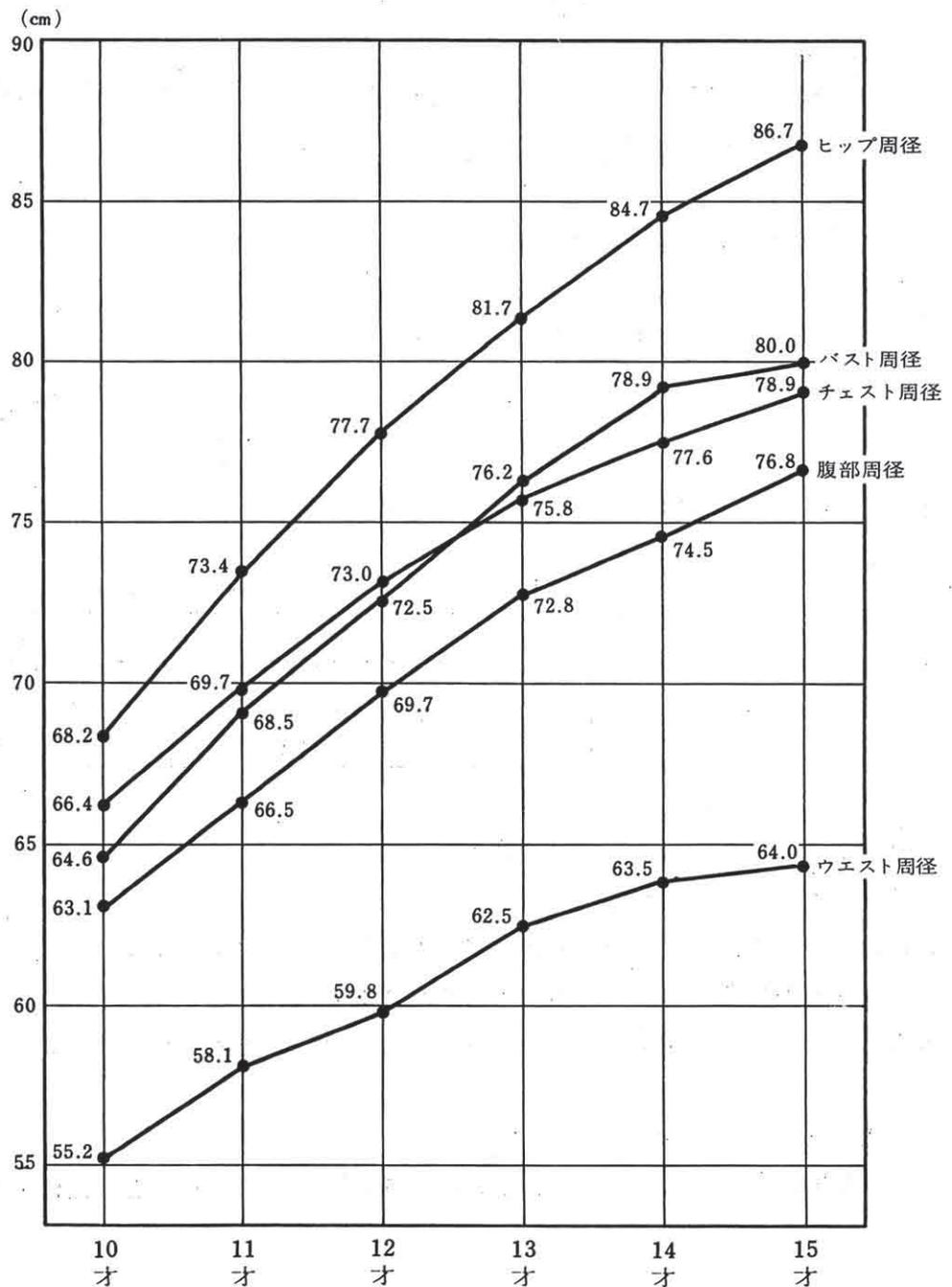
# 【1】身体主要部位の年齢別比較

女らしいからだつきになるのは、12才から13才にかけて

ティーンのプロポーションを明確に把握するために、まず基本となるバスト・ウエスト・ヒップ、それにチェスト、腹部周径を測定してみました。

バストがチェストより大きくなるのは、12才から13才にかけて。13才以上になると、ウエストもくびれて、女らしいからだつきになることがわかります。

身体主要部位の年齢別平均値表



## 【2】身体主要部位の増加量

成長が著しい時期は、10～11才の間

次に、身長・体重・バストなど身体主要部位の増加量を出してみました。

①バストに関する項目以外はすべて、10～11才で成長のピークを迎えている。

②それ以降の成長量は、ゆるやかな下降線をたどることが、読みとれます。

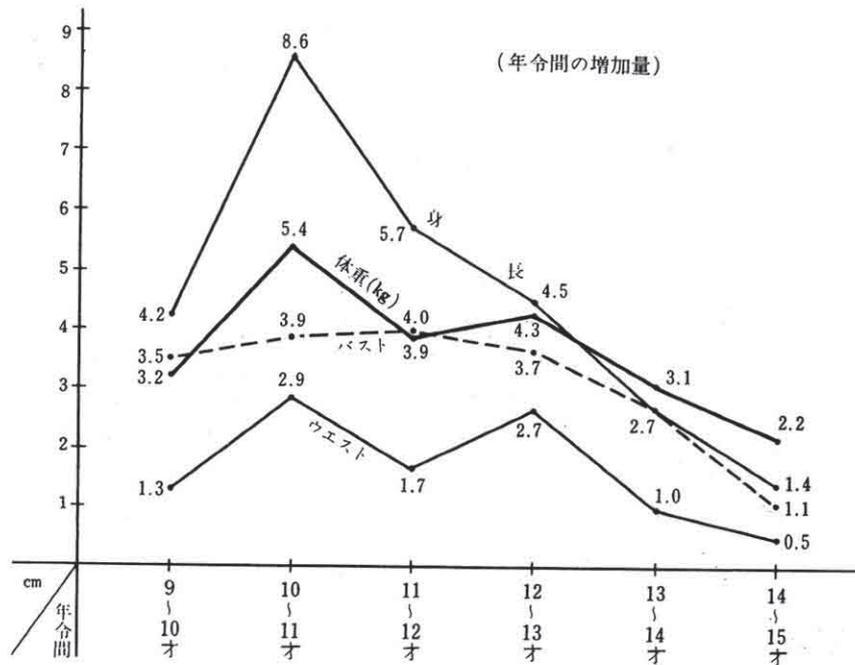
また、バストと乳房ボリュームに関しては、1

年遅れの11～12才にかけてが、成長の著しい時期です。これは、9ページの『乳房のふくらみ状況』の調査結果と一致します。

**注** 増加量の算出方法

④ 10～11才にかけての身長の増加量 = 11才の身長値 - 10才の身長値

身体主要部の増加量



その他の部位の増加量 (cm)

年令間 部 位	9～10 才	10～11 才	11～12 才	12～13 才	13～14 才	14～15 才
ヒップ 周 径	2.4	5.2	4.3	4.0	3.0	2.0
腹 部 周 径	3.2	3.4	3.2	3.1	1.7	2.3
太 股 周 径	1.8	2.9	2.1	2.2	2.0	1.2
アーム ホールド	1.5	1.6	1.2	1.4	0.9	0.9
(TB-UB) 周 径	1.4	1.1	2.0	1.0	1.7	0.6

# [3]百分率成長曲線

15才のからだつきは、ほぼ成人のからだつき

人体の主要部位が、どのような過程を経て成人値に達するかを調べました。

下のグラフは、20～29才の平均値を100とした場合の各年齢の比率を表わしたものです。

結果をまとめると、成長曲線は次の三つに分けられることがわかります。

### ●第一のグループ(身長とウエスト)

早熟タイプともいえるグループで、10才で既に85%もの成長度を示しています。それ以降の成長はゆるやかです。

### ●第二のグループ(バストとヒップ)

成長の度合いは、ふつうタイプです。両者ともよく似た曲線を描いていますが、14才まではヒ

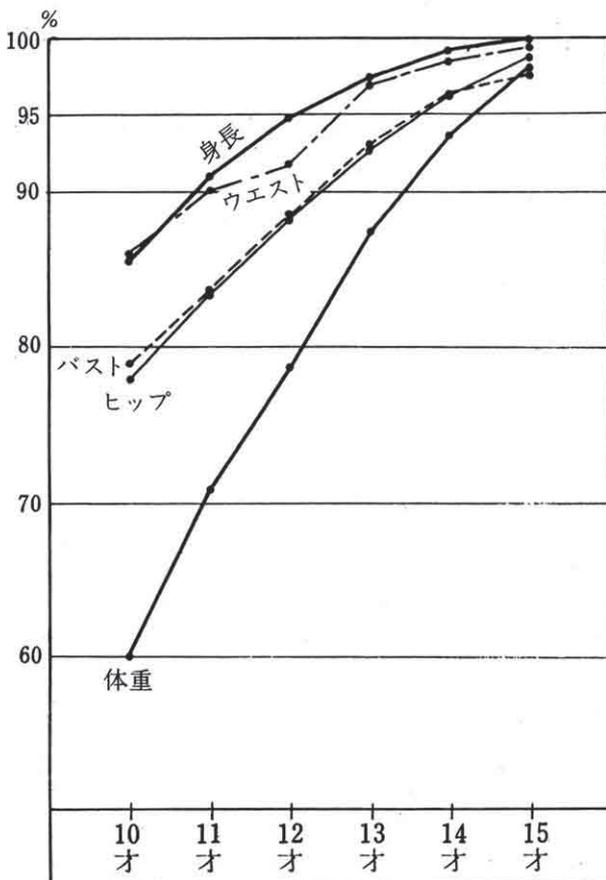
ップよりバストの成長がやや進み、14才以降では逆転。ヒップの成長が目だつようになります。

### ●第三のグループ(体重)

晩成タイプで、10才では成人の60%の成長度しかありません。しかし、それ以降、13才までの短期間に急速な成長を遂げ、15才では、成人の98%にまで達します。

こうして15才では、身長は100(成人と同数値)、ウエスト 99.4、ヒップ 98.7、バスト 97.8、体重 98.2 という数値になり、ほぼ成人並みのからだつきになります。

百分率成長曲線



		(%)					
年令 部位	10才	11才	12才	13才	14才	15才	
	身長	85.4	90.9	94.5	97.4	99.1	100.0
体重	60.0	70.9	78.8	87.5	93.7	98.2	
バスト	79.0	83.7	88.6	93.2	96.5	97.8	
ウエスト	85.7	90.2	92.9	97.0	98.6	99.4	
ヒップ	77.7	83.6	88.5	93.1	96.5	98.7	

# 【4】肥満度分布

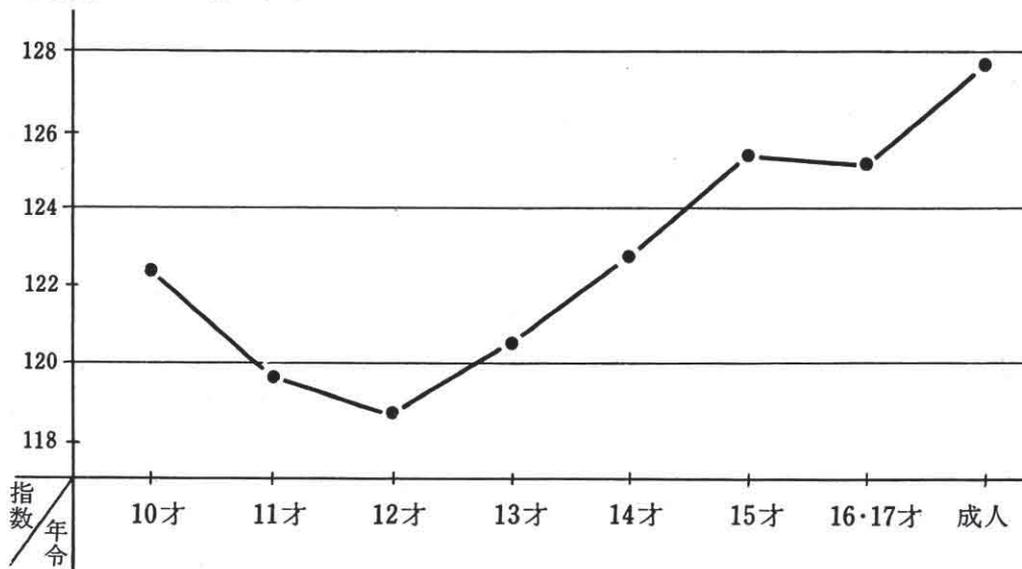
12才が女性の一生の中で一番ほっそりしたからだつき

ローレル指数<sup>(注1)</sup>による年齢別の肥満度平均値と、  
 肥満度分布状態<sup>(注2)</sup>を調査してみました。  
 成人と比較すると、ティーンでは肥満指数がかなり低いことがわかります。特に10~12才では、過半数がヤセ型の分類に入り、中でも12才は、もっともほっそりした体型をしていることが注目されます。

**注1** ローレル指数 =  $\frac{\text{体重}}{\text{身長}^3} \times 10^7$

- 注2** ローレル指数区分方法
- 119以下 — ヤセ
  - 120~139 — ふつう
  - 140以上 — 肥満

年齢別の肥満度(ローレル指数)平均値



肥満度分布状態

10~12才	やせ 54%	ふつう 36%	肥満 10%
13~15才	47%	42%	11%
16~17才	41%	45%	14%
成人	28%	56%	16%

# 【5】プロポーション

年齢があがるにつれて7頭身に近づくがローティーンほどバスト位置が高く、脚が長い

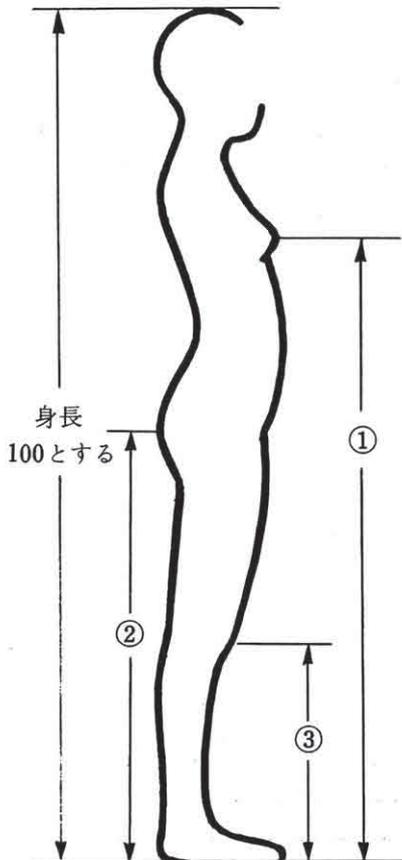
プロポーションを把握するために、まず頭身を出してみました。

10才では6.1頭身ですが、年齢があがるにつれて、徐々に7頭身に近づいていきます。

次に、身長を100とした場合の、①バスト高、②ヒップ高、③膝中央高を算出し、さらにくわ

しいプロポーションを調べてみました。

①、②、③とも、年齢があがるにつれて、身長比が低くなっていきます。これは、ローティーンほど、バスト位置が高く、脚も長いことを示しています。



バスト高、ヒップ高、膝高の身長比

年齢 部位	10才	11才	12才	13才	14才	15才	16・17才	成人
①バスト高	71.6	71.5	71.4	71.5	71.2	71.0	70.8	70.4
②ヒップ高	50.1	50.1	50.1	49.7	49.5	49.6	49.1	48.2
③膝高	28.1	26.9	26.7	26.3	26.1	26.4	26.2	26.0

身長を100として、各部位の比率

頭身の推移

年齢	10才	11才	12才	13才	14才	15才	16・17才	成人
頭身	6.1	6.4	6.5	6.6	6.8	6.7	6.8	6.7

## 【6】乳房のふくらみ状況と初潮

14才ではほぼ全員の乳房がふくらむ。初潮を迎えるのは乳房がふくらみ始めて1~2年後

乳房のふくらみ状況を、パーセンテージで表わしたのが下の表です。

- 10才ですでに5人に1人がふくらんでおり、
- 11才から12才にかけて飛躍的に伸び、
- 14才で99%とほぼ全員がふくらむ、ことがわかります。

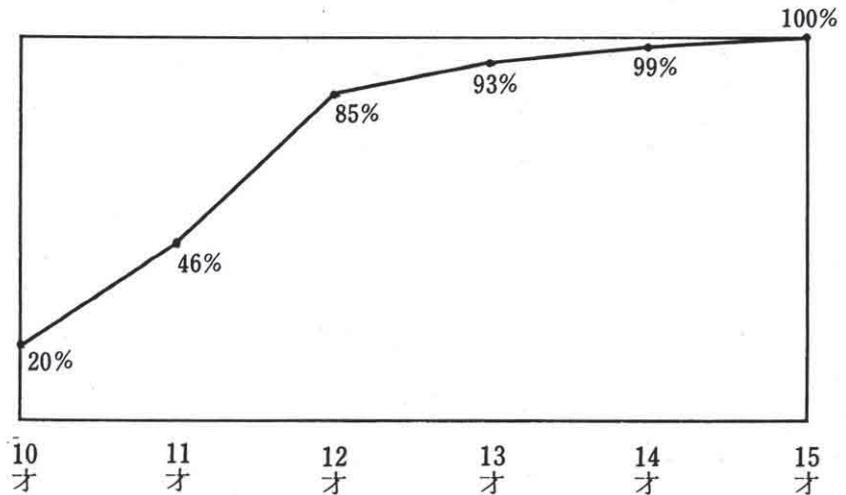
既潮率は、各年令の数値は“乳房のふくらみ状況”を下まわるものの、11才から14才にかけて急速に増加することが読みとれます。

この2つのグラフを比較検討してみると

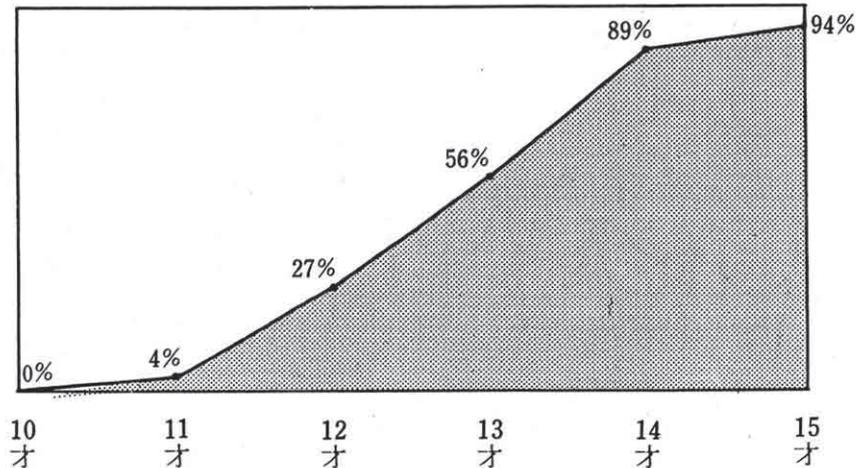
- ①既潮者は、だいたい乳房がふくらんでいる。
  - ②2つの折れ線が似かよっていることから、初潮と乳房のふくらみは、深い関係があることが、指摘できます。
- 以上のことから、“初潮を迎えるのは、乳房がふくらみ始めて1~2年後”といえるでしょう。

**注** バージスライン(乳房の形を縁どる下辺の線)が描ける場合を、“乳房がふくらんでいる”とした。

乳房のふくらみ状況



年令別既潮率



# 【7】ティーンと成人との比較

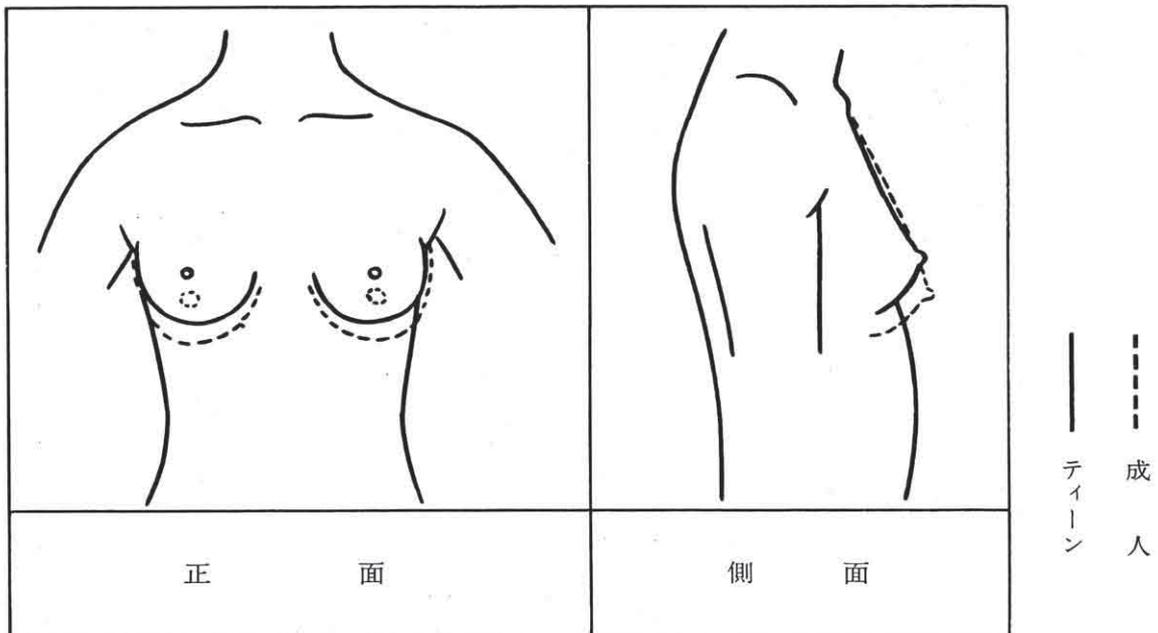
同じバストサイズでも、ティーンと成人では体型に大きな違いがある

これまでの調査結果からも、ティーンは成人と異なる体型をもつことが明らかになりました。ここではそれをよりはっきりさせるために、同じバストサイズでのティーンと成人を比較してみました。

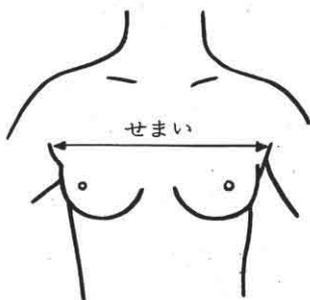
その結果、ティーンは成人より

- バスト位置が高く
- 前腋部分が狭く
- 体幹が丸く
- 脇の部分が狭い

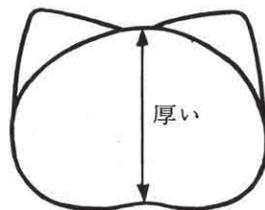
ことが、明らかになりました。



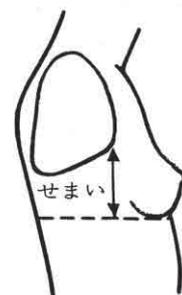
前腋間隔が狭い



体幹が丸い(厚い)



脇の部分が狭い



# 【8】過去との比較

13年前に比較すると、ヒョロッとしてズン胴になっている

最後に、ティーンの体格は過去と比較してどう変化したのか、13年前のJIS計測値と照らしあわせてみました。

各年令とも、体重・身長・バスト・ウエスト・ヒップの各部位の計測値が、13年前を上まわって体位の向上をはっきり示しています。

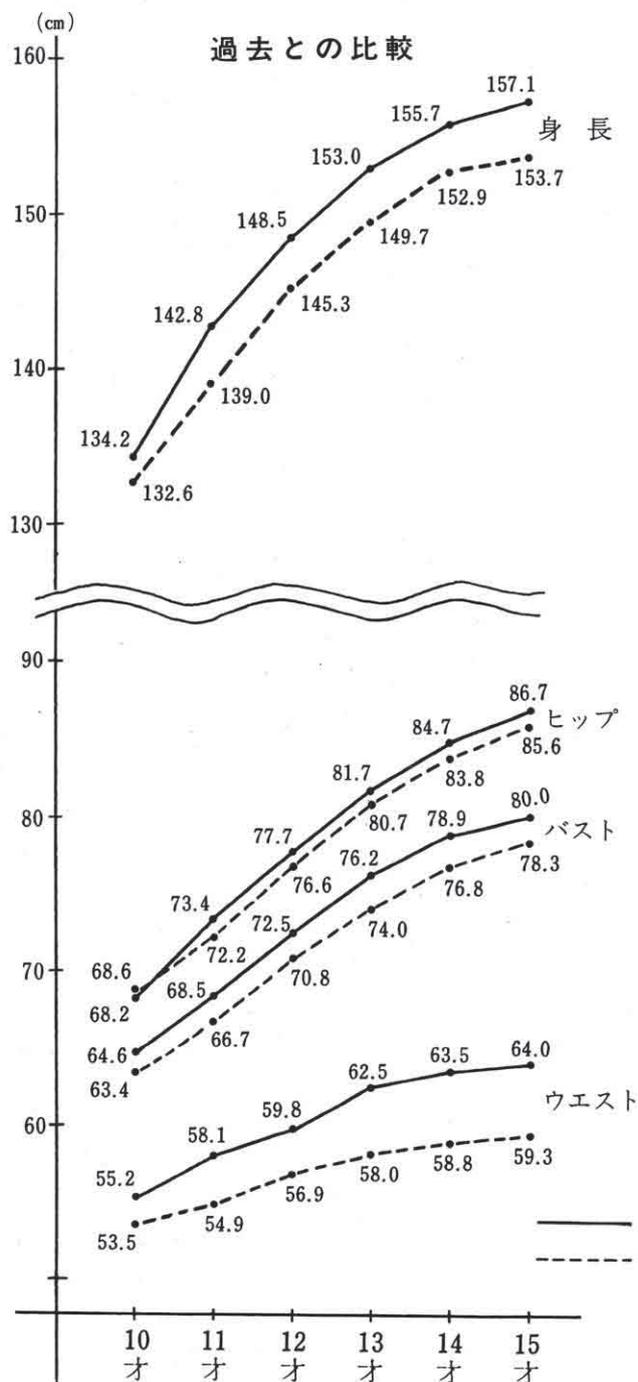
しかし、特に目につくのは、

- 身長と比較して体重が増加していない（肥満度を表わすローレル指数も、13年前より減少している）

- バスト・ヒップの数値の増加より、ウエストの増加が著しい

の2点です。

このことから、13年前と比較すると、現在のティーンは「ヒョロッとして、ずん胴タイプ」になったと、指摘できます。



		10才	11才	12才	13才	14才	15才
体重	1980年 ワコール	29.7	35.1	39.0	43.3	46.4	48.6
	1967年 J I S	28.2	32.0	36.6	40.8	44.4	46.1
ローレル 指数	1980年 ワコール	122	120	119	121	123	125
	1967年 J I S	121	119	119	122	124	127

10年間の平均的变化量

身長	3.0
体重	2.3
ローレル 指数	-0.4
バスト	1.8
ウエスト	3.6
ヒップ	0.8

## ② 生活、からだ、下着の意識・実態調査

# 【調査概要】

●調査対象 中・高校生女子(中学1年生～高校3年生) 2,871名

中学生	中学1年	中学2年	中学3年	TOTAL
	162	431	555	1,148名

高校生	高校1年	高校2年	高校3年	TOTAL
	379	959	385	1,723名

●調査地域 全国主要都市

●調査期間 昭和55年3月～5月

●調査方法 アンケート方式

④ 『関心のある下着』、『下着の所有実態—④スリップ—』の項に登場するグループインタビューは、中学生・高校生・短大・大学生・高卒社会人計44名を対象に55年の4月に実施したものです。

# 【調査分析内容の概要】

## ①生活やからだに対する考え方

●関心を持っていることは、中学生では「クラブ活動」や「スポーツ」、高校生では「恋愛」や「おしゃれ」で両者の間には大きな違いがある。この関心事の変化は、ブラジャー着用と深い関連があり、≪異性への関心が高まると、おしゃれへの関心も深まり、ブラジャー着用が始まる≫といえる。ブラジャー着用は、異性への関心の芽生え、とも考えられるようだ。

●からだに対しては、自分自身を“太り気味”と評価している人は中学校より高校生に多く、からだへの関心度は、年齢とともに高くなることがわかった。

●気になるからだの部分は、「あし」がトップ。しかし高校生になると、「おなか」や「ウエスト」、「ヒップ」も強く気にし始める。

●初潮時の印象は、さまざまである。ドキドキしたり、恥ずかしかったり、人に知られたくなかったり、当然と思ったり……。しかし、印象はそれほど強いものではないようである。

## ②ブラジャーのつけ始め状況とブラジャーについて

●ブラジャーのつけ始め時期は、小6から中2の間に集中している。小6では4人に1人が、中1では5人に2人がつけ始めている。

●つけ始める(直接的)動機は、「体育のとき必要だから」や「バストが目だってくる」など、主体的な解答も多いが、「友だちがつけ始めたので」や「まわりの人にすすめられて」など、周囲の影響が大きい。

●「まわりの人にすすめられて」ブラジャーをつけ始めた人は、3人に1人。そのまわりの人とは、「母親」であることが、圧倒的に多い。中学生では、母親への依存度が高いことが指摘できる。

●つけ始めブラジャーのカラーは、白が圧倒的である。しかし、ベージュのブラジャーも増加しつつある傾向も認められる。

●ブラジャーのつけ始めの印象は、半数近くが覚えていない状態で、自然に受け入れられていると推測できる。しかし、「よい印象とはいえない」や「悪い印象が残っている」という解答も、4割近くあり、ブラジャー着用にあたっては、正確な知識や適切なアドバイスの必要も感じられる。

●ブラジャー着用の目的として、機能性の問題(バストを安定させる役割)、ファッション性、エチケットとして、の3つは広く認識されている。しかし、年齢があがるにつれて、ブラジャーの役割は、バストを目立たなくさせるから、バストをかたちよく、大きく見せることに変化するようだ。

●ブラジャーの好みのカラーは、学年があがるにつれて白からベージュへ変化している。

### ③下着生活・下着全般について

- 下着に対する教育は、家庭において厳しくなされていない。3人に2人が、母親の下着教育を「ふつう」か、「厳しくなかった」と感じている。「しつけを受けなかった」人も、5人に1人弱いる。
- 学校における下着教育は、「受けなかった」人が、4割を占める。厳しい下着教育を受けた人は、1割弱にすぎない。
- 下着購入にあたっては、中学生では母親同伴がほとんど。年齢があがるにつれて、「友だち」や「1人で」も増えてくる。
- 中学生が下着で思いつくものは、「ショーツ」、「スリッパ」、「ガードル」である。この3つが、下着とのつきあいの第一歩になる。
- 高校生が関心を持っている下着は、ブラジャー。以下ボディースーツ、ペチコート、ガードルである。
- 下着の所有実態＝ブラジャーは、実際つけていなくても所有している人が多く、中1でほぼ全員が持っている。
- 下着の所有実態＝ショーツの1人平均の所有

枚数は、中1で約5枚。高3で約8枚である。

- 下着の所有実態＝生理用ショーツの所有枚数は、学年による差はなく、1人だいたい3枚である。
- 下着の所有実態＝スリッパの所有率は、中2がピーク。中3から高校にかけて、スリッパ離れがおき、所有率・所有枚数とも減少する。
- 下着の所有実態＝ペチコートの所有率は中3で急増。高3では、8割強が所有し、1人あたりの平均所有枚数は、約2枚である。
- 下着の所有実態＝ブラスリッパを所有している人は、中学生には少ないが、高校生になると約半数が、1枚強を所有している。
- 下着の所有実態＝ガードルの所有率は、中3から急増、所有枚数も、だんだんに増えていく。
- 下着の所有実態＝ボディースーツを持っている人は少なく、高3でも5人に1人にすぎない。1人あたりの平均所有枚数も1枚を割る。
- 下着の所有実態＝シャツ類は、所有率・平均所有枚数とも中1がトップで、その後、下降線をたどる。

# 【1】関心を持っていること

中学生は「クラブ活動や」「スポーツ」。高校生は「恋愛」や「おしゃれ」や「旅行」。

今、一番関心を持っていることを、たずねてみました。

その結果、中学生と高校生では、かなり違いがあることがわかりました。

それぞれ、ベスト5を拾ってみると、

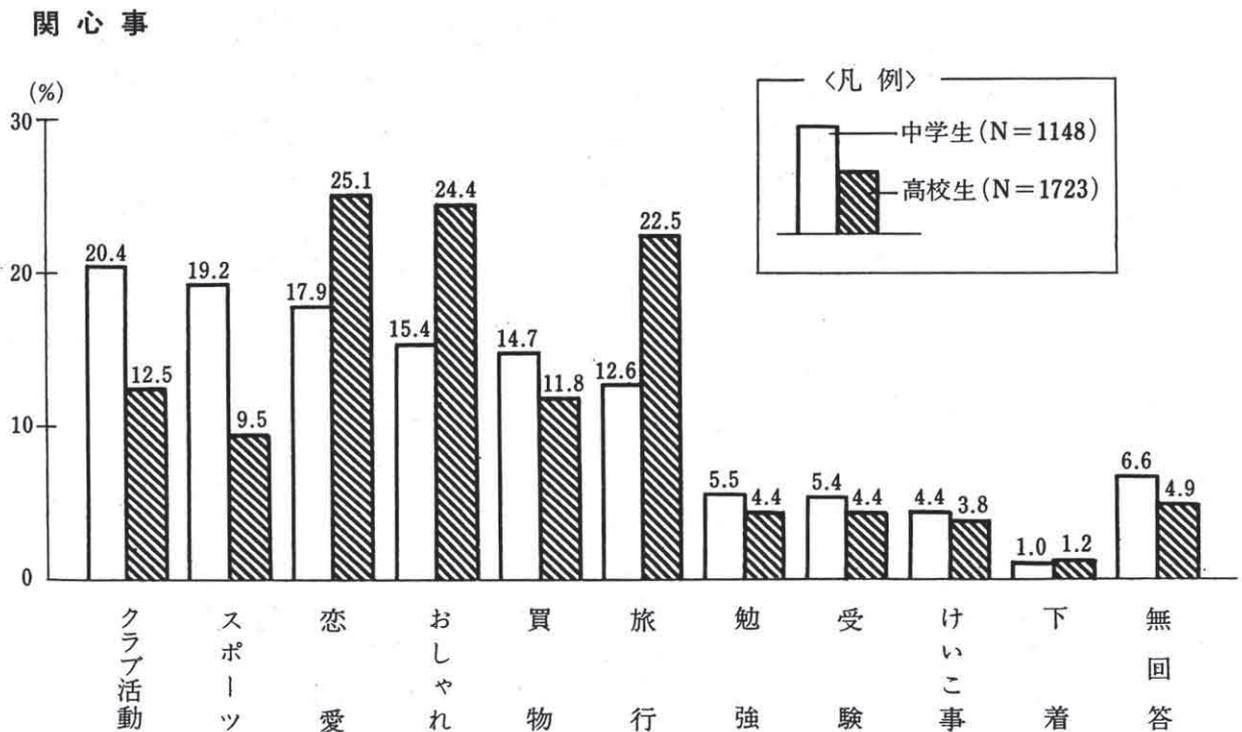
〈中学生〉	〈高校生〉
① クラブ活動 (20.4%)	恋 愛 (25.1%)
② スポーツ (19.2%)	お しゃ れ (24.4%)
③ 恋 愛 (17.9%)	旅 行 (22.5%)
④ お しゃ れ (15.4%)	ク ラ ブ 活 動 (12.5%)
⑤ 買 物 (14.7%)	買 物 (11.8%)

となります。

中学生では、「クラブ活動」や「スポーツ」など仲間意識を持ったものに強い関心が注がれ、高

校生では「恋愛」、「おしゃれ」とプライベートな面に興味の対象が移っています。

ところで、「恋愛」や「おしゃれ」への関心は、異性に対する関心の表われといえますが、これはブラジャー着用とも深い関係がありそうです。中学生を対象に、ブラジャーの着用・未着用者別に、関心のあるものを調べると、ブラジャー着用者に「恋愛」、「おしゃれ」をあげる人が多く、ブラジャー着用は、異性への関心の芽生えのバロメーターとも考えられるのです。つまり、《異性への関心が高まると、おしゃれへの関心も深まり、ブラジャー着用が始まる》といえるのではないのでしょうか。



## [2]ボディタイプの意識

中学校より高校生のほうが、自分のボディへの関心度は高い

ボディに対する考え方を調べるために、まず、自分自身のボディをどうみているかを調査しました。

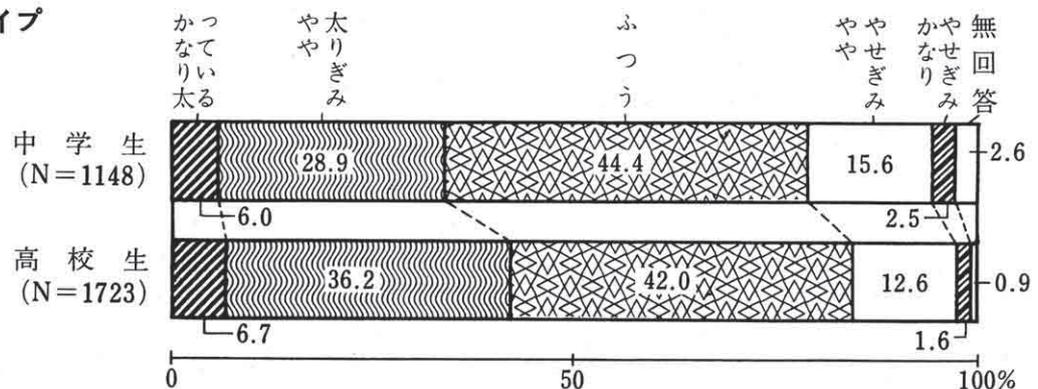
中・高校生とも4割強が、自分のタイプを“ふつう”とみています。次いで多いのが、太め（“かなり太っている”と“やや太りぎみ”）という評価ですが、①の体型特徴7ページの「肥満度分布」を調べると、肥満とみられる人は実際は1割強程度（13～15才は11%、16・17才は14%）にしかすぎません。それほど太ってなくても、自分を太りぎみと思っている人がか

なりいるわけで、太めの評価は、ボディへの関心の強さとも受けとれます。中学生では3人に1人が、高校生では5人に2人以上が、自分を“かなり太っている”か“やや太りぎみ”とみているわけですから、中学生より高校生のほうが、ボディに対する関心度が高いといえます。

一方、やせぎみとみている人は、中学生で18.1%、高校生で14.2%と中学生のほうが多いようです。実際にも、高校生より中学生のほうがやせぎみの人がやや多いようです。

（①の体型特徴7ページ「肥満度分布」より）

ボディタイプ



# 【3】気になるからだの部分

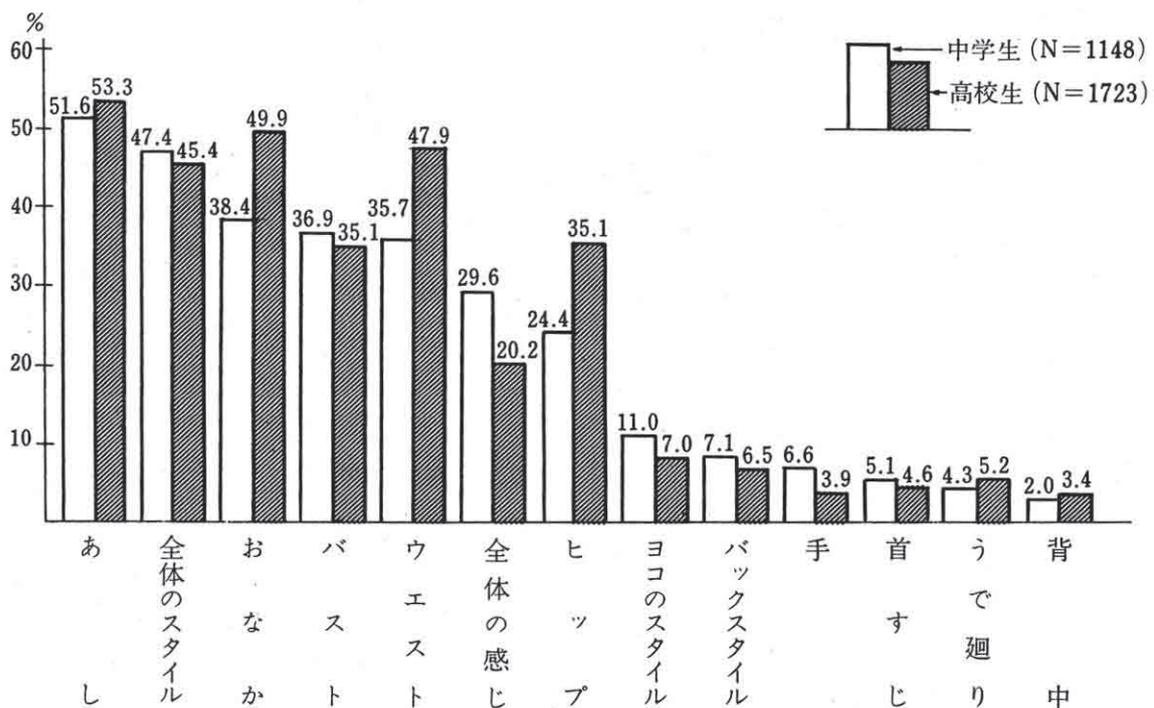
中・高校生とも「あし」が第1位

さて次に、からだのどの部分に関心をはらっているか、気になるところを答えてもらいました。中・高校生とも「あし」、「全体のスタイル」「おなか」、「バスト」、「ウエスト」などが上位を占めています。具体的に、それぞれのベスト5を整理してみると、

〈中学生〉		〈高校生〉	
1. あし	51.6%	あし	53.3%
2. 全体のスタイル	47.4%	おなか	49.9%
3. おなか	38.4%	ウエスト	47.9%
4. バスト	36.9%	全体のスタイル	45.4%
5. ウエスト	35.7%	バスト	35.1%
		ヒップ	35.1%

となります。中・高校生とも「あし」が気になるという人がトップで、過半数を占めている点は共通です。しかし「おなか」、「ウエスト」、「ヒップ」が気になる人は、中学生より高校生のほうが1割強多くなっているのが、注目されます。また、学年があがる（年齢があがる）とともに気にならなくなるのは、「バスト」。反対に、だんだん気になってくるのが「おなか」、「ウエスト」、「ヒップ」という結果も出ました。

## 気になる部分



# 【4】初潮時の印象

「ドキドキ」し、「恥ずかし」く、「人に知られたくない」けれど「当然だと思った」

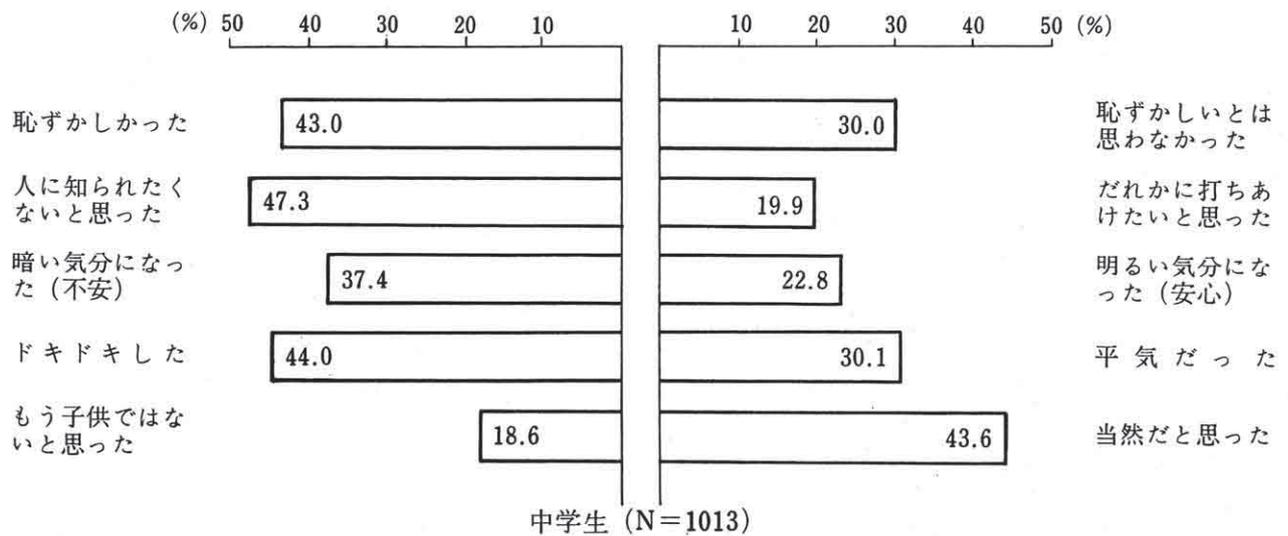
初潮を迎えたときの印象を、中学生にたずねてみました。

「人に知られたくなかった」(47.3%)、「ドキドキした」(44.0%)、「恥ずかしかった」(43.0%)が多かったのですが、反面「当然だと思った」(43.6%)、「平気だった」(30.1%)という印象をもった人も、かなりいました。

これは、性に対する考え方の社会的変化、学校や家庭における生理教育が多いに関係しているとも考えられます。

いずれにしても、初潮時の印象はそれほど強いものではなく、時がすぎると薄れていく軽い動揺と受けとれます。

初潮時の印象



## [5]ブラジャーのつけ始め時期

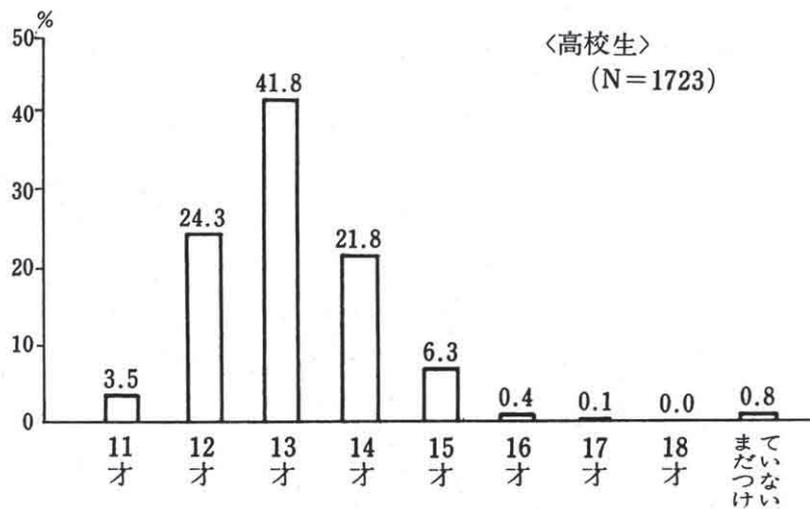
小6(12才)で4人に1人が、中1(13才)で5人に2人がつけ始める

ブラジャーをつけ始める時期はいつか、高校生に過去の体験を質問することで調査しました。「13才(中1)から」がもっとも多く、4割強。ついで「12才(小6)から」、「14才(中2)から」が、それぞれ2割強ありました。つまり、ブラジャーをつけ始める時期は、12才(小6)から、14才(中2)までの間に集中しているというわけです。こうして14才(中2)

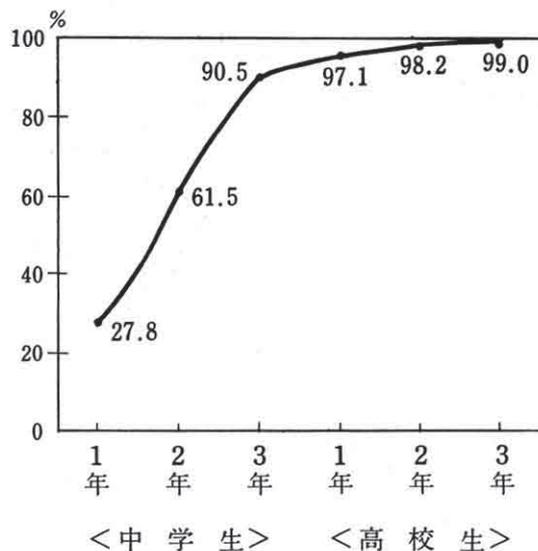
の段階までに約9割の人が、15才(中3)にはほぼ全員がブラジャーをつけ始めていることがわかりました。

参考までに、中学生・高校生のブラジャー着用率の調査結果も下に表にして、紹介しています。学年があがるにつれて、着用率がのびています。高校生になった段階では、ほとんどの人がブラジャーをしていることが、明確に出ています。

ブラジャーのつけ始め時期



ブラジャーの着用率



## 【6】ブラジャーのつけ始め理由

つけ始めるにあたっては主体性もやや感じられるが、周囲の影響が一番大きい。

それでは、なぜブラジャーをつけ始めたのか？という問題です。この調査は、つけ始めてまだ時間のたっていない中学生を対象におこないました。

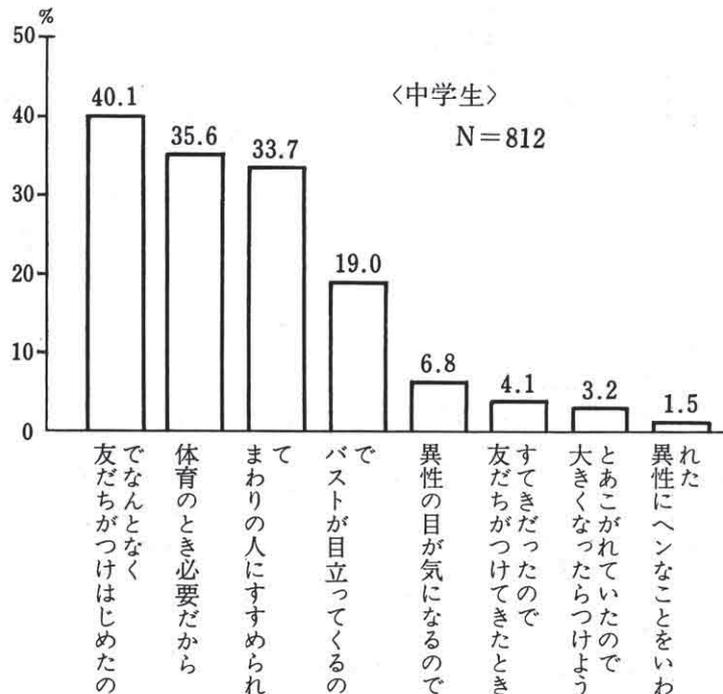
結果は、「友だちがつけ始めたのでなんとなく」が、40.1%でトップ。ついで「体育のとき必要だから」の35.6%、「まわりの人にすすめられて」の33.7%、「バストが目だってくるので」の19.0%と続きます。

「異性の目が気になる」や「大きくなったらつけようというあこがれ」という解答は、きわめて低い数字でした。

以上のことから、ブラジャーをつけ始めるにあたっては「体育のとき必要だから」や「バストが目だってくるので」など、主体性をもって選んでいる人も多いが、大半は、友だちの動向やまわりの人のアドバイスに影響されていることがわかりました。

17ページの『関心のあること』で、ブラジャーに関して述べたことと、この調査結果を照らしあわせて考えるとブラジャー着用にあたっては間接的動機に異性への関心があり、直接的動機に周囲の影響がある、といえるでしょう。

つけ始めの理由



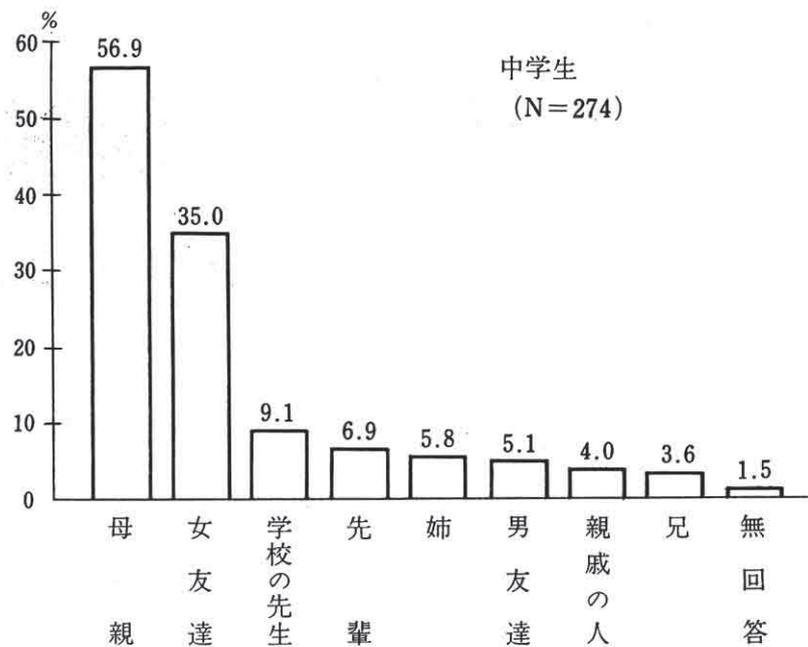
## 【7】ブラジャーの着用をすすめた人

母親と女友だちが多いが、特に母親の影響が大

前ページの「ブラジャーをつけ始めた理由」で、3人に1人があげていたのが、「まわりの人にすすめられて」です。そこでこの「まわりの人」とは、具体的にだれをさすのか、調べてみました。「母親」(56.9%)、「女友だち」(35.0%)の2つが圧倒的に多く、「学校の先生」、「先輩」

「姉」からは、ごく少数でした。中でも半数以上が「母親」をあげているのが、注目されます。やはり中学生の場合、母親へ依存する割合は、きわめて高いことを裏づけています。

ブラジャー着用をすすめた人



# 【8】つけ始めブラジャーのカラー

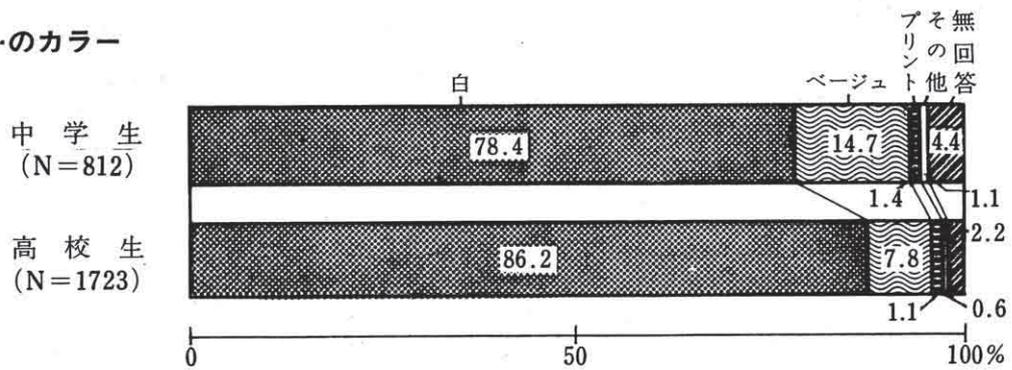
つけ始めブラジャーは白が圧倒的

つけ始めブラジャーの色は、何色かを調査したところ、中・高校生とも、白が圧倒的に多いという結果を得ました。これは、〈下着の色は白〉という幼児からの下着生活の継続と、清潔なイメージの白がティーンに好まれていることを物語っています。  
また、ベージュのブラジャーの着用が、高校生

より中学生に多い点も注目されます。アウトウェアにひびかないベージュの実用性が、ティーンにも認識され、ベージュの割合が増えていることが読みとれます。

⑨ 『ブラジャーの好みのカラー』(27ページ)をみると、ベージュ嗜好がかなり強いことがわかります。

ブラジャーのカラー



# 【9】ブラジャーのつけ始めの印象

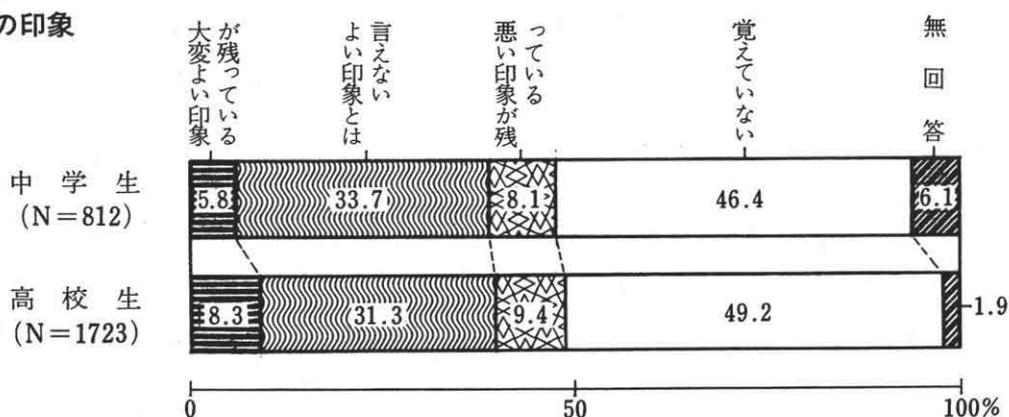
半数近くが、覚えていない

ブラジャーをつけ始めたときの印象を調べました。

中・高校生とも約半数が、「覚えていない」という解答で、自然に受け入れられているようです。「よい印象とはいえない」や「悪い印象が残っている」は、4割強ありました。スリップなどと違って、からだにぴったりフィットすること

が要求されるブラジャーは、購入・選択にあたって、それなりの知識が必要です。ブラジャーのつけ始めの印象があまりよくないことは、下着教育の不完全さ（28ページの『下着教育の状況』参照）によるブラジャー選択の誤りも、一因として考えられるのではないのでしょうか。

つけ始めの印象



# 【10】ブラジャーの着用目的

目だたせないためから、バストの強調へ。中学生と高校生では微妙に目的が変化する

ブラジャーの着用目的をどう考えているか、中学生と高校生を対象に調査しました。

その結果は下の表のとおりですが、両者の着用目的を上から順に第5位までを、ひろってみると、

	〈中学生〉	〈高校生〉
1. バストを安定(固定)させるため	63.3%	バストを安定(固定)させるため 69.7%
2. エチケットだから	57.1%	ファッションとして 49.0%
3. ファッションとして	42.9%	エチケットだから 46.6%
4. 全体のバランスをよくするため	42.2%	バストラインを美しくするため 43.9%
5. バストを目だたせないようにしたいので	40.0%	習慣だから 42.6%

となります。

中・高校生とも、第三位までは(順序に若干の違いがあっても)同じ項目があがっています。

これは、彼女たちがブラジャーの、

- バストを安定させるという機能面
- ファッション性
- エチケット面

については、かなり重要視していることを物語っています。

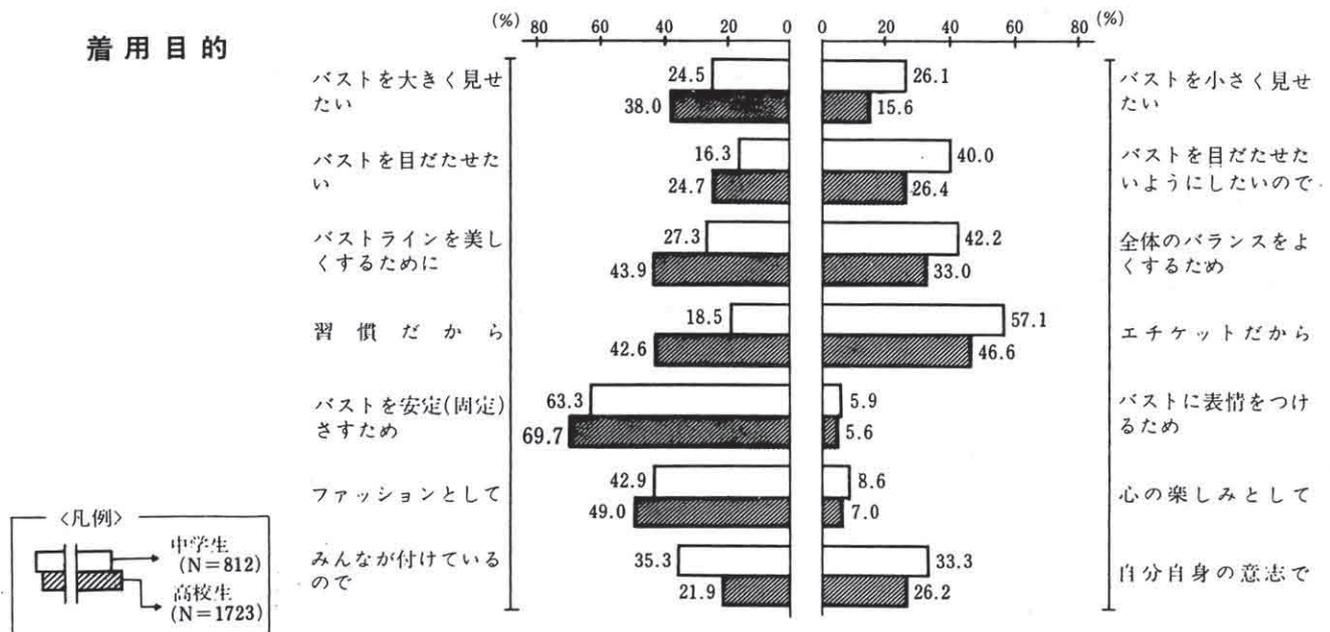
しかし、4位以下をみると、中学生では第5位に「バストを目だたせないようにしたいので」があるのに、高校生ではそれがなく、しかも「バストラインを美しくするため」と、逆の目的が4位にあがっている点が、注目されます。

念のために、両者の間にかんがりの違いが認められる項目を整理してみると、次のようになります。

	〈中学生〉	〈高校生〉
バストを目だたせないようにしたいので	40.0%	26.4%
バストラインを美しくするため	27.3%	43.9%
バストを大きくみせたい	24.5%	38.0%
習慣だから	18.5%	42.6%

中学生では、バストを目だたないように隠そうとする意識が強いようですが、高校生になると反対にバストの美しさ、魅力を強調する方向へブラジャーの着用目的が変化することが読みとれます。また、「習慣だから」の解答の増加(18.5%→42.6%)は年齢があがるにつれ、ブラジャー着用が習慣化することを証明しています。

着用目的



# 【11】ブラジャーの好みのカラー

学年があがるにつれ、白からベージュへ好みが変わる。

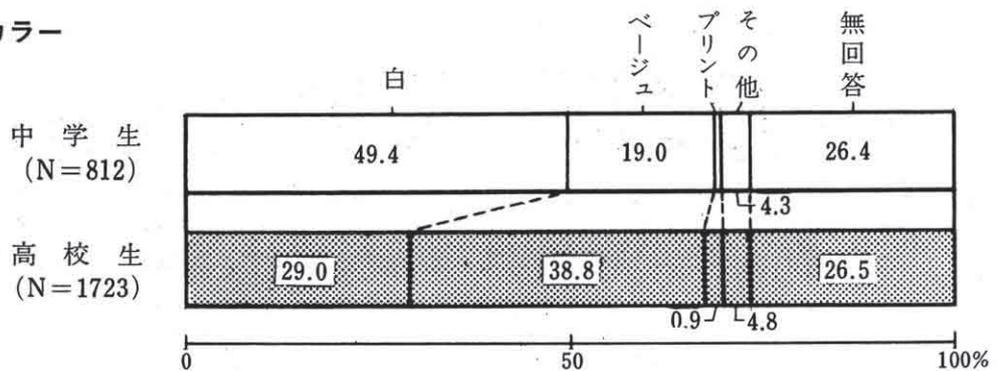
一番気に入っているブラジャーのカラーを、調べてみました。

中学生では約半数が白ですが、高校生では白の割合が3割程度に減り、かわってベージュが台頭(約4割)してきます。

『つけ始めブラジャーのカラー』調査(24ページ)ではじめてのブラジャーは、白が圧倒的であっ

たことを考えると、興味深いものがあります。<ブラジャーの色は、はじめ白から入り、学年があがるにつれて白からベージュに、好みが変わる>と規定できるでしょう。高校生の場合は、持っていないくても、ベージュのブラジャーが好き、という人が多いとも受けとれます。

好みのカラー



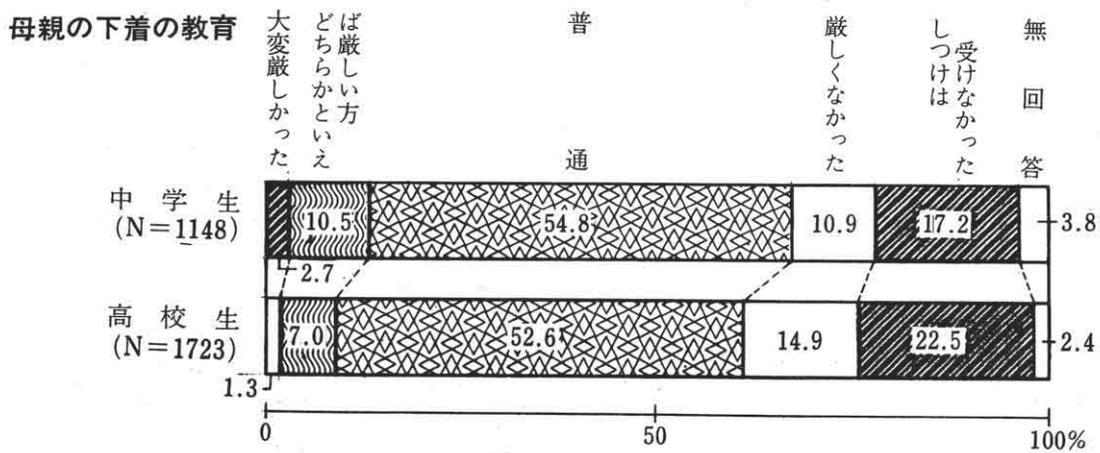
# 【12】母親の下着教育

厳しい下着教育を受けた人は、ごく一部である。

下着教育の実際の状況を把握するために、まず家庭における母親の下着教育の状況を調査しました。

中・高校生とも、3人に2人が、自分の母親の下着教育を「ふつう」か、「厳しくなかった」と

判断しています。「厳しかった」と答えている人は、中学生では13.2%、高校生では8.3%にすぎません。しかも、「しつけを受けなかった」という人が、5人に1人弱もいるのが、目につきます。



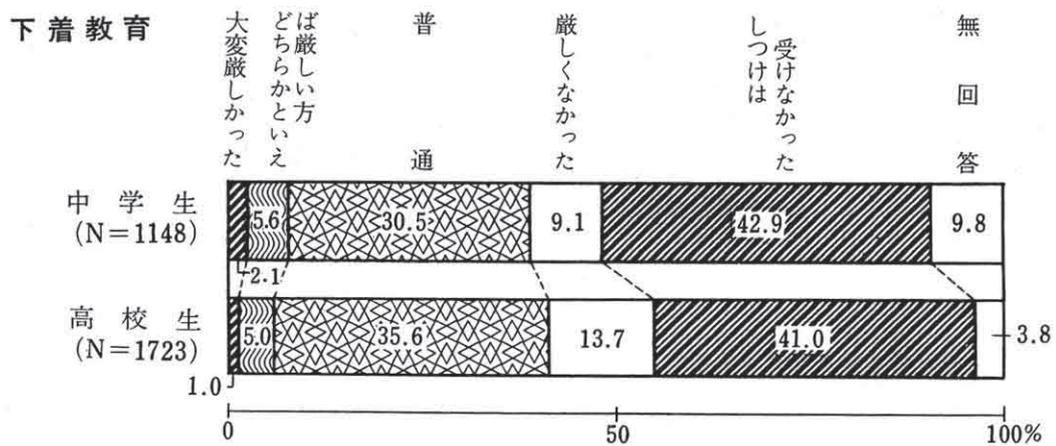
# 【13】学校における下着教育

「学校で下着教育を受けなかった」人は、4割弱

次に、学校における下着教育はどのような状態であるかを調べてみました。

ここでも、厳しい教育を受けたという人は少なく、中・高校生とも1割に満たない状態です。また、「下着教育を受けなかった」という人が、4割も占めています。

『母親の下着教育』の状況と照合してみますと、中・高校生の下着教育は、母親からも学校からも厳しくなされていないことが、明らかです。また、下着に関して教育やしつけをまったく受けない人も、若干いることが数字の上から読みとれます。



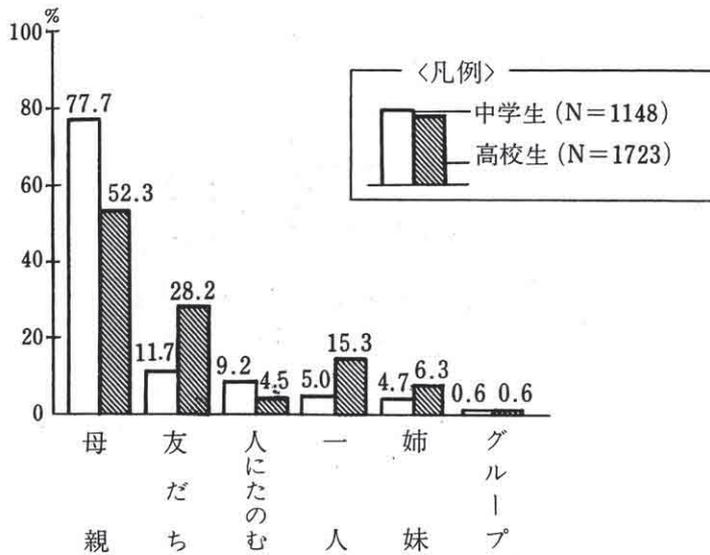
# 【14】下着購入時同伴者

中学生は母親、高校生は母親か友だち

下着を買いに出かけるとき、一緒に行くのはだれかを調査しました。  
 中・高校生とも「母親」が最も多く、ことに中学生では、10人中8人程度が母親同伴です。

高校生になると、「母親」について、「友だち」や「1人で」というのも、目だって増えてきます。  
 学年があがるにつれて、母親を離れて、友だちや1人で買いに行く傾向が認められます。

購入時同伴者



# 【15】下着で思いつくもの

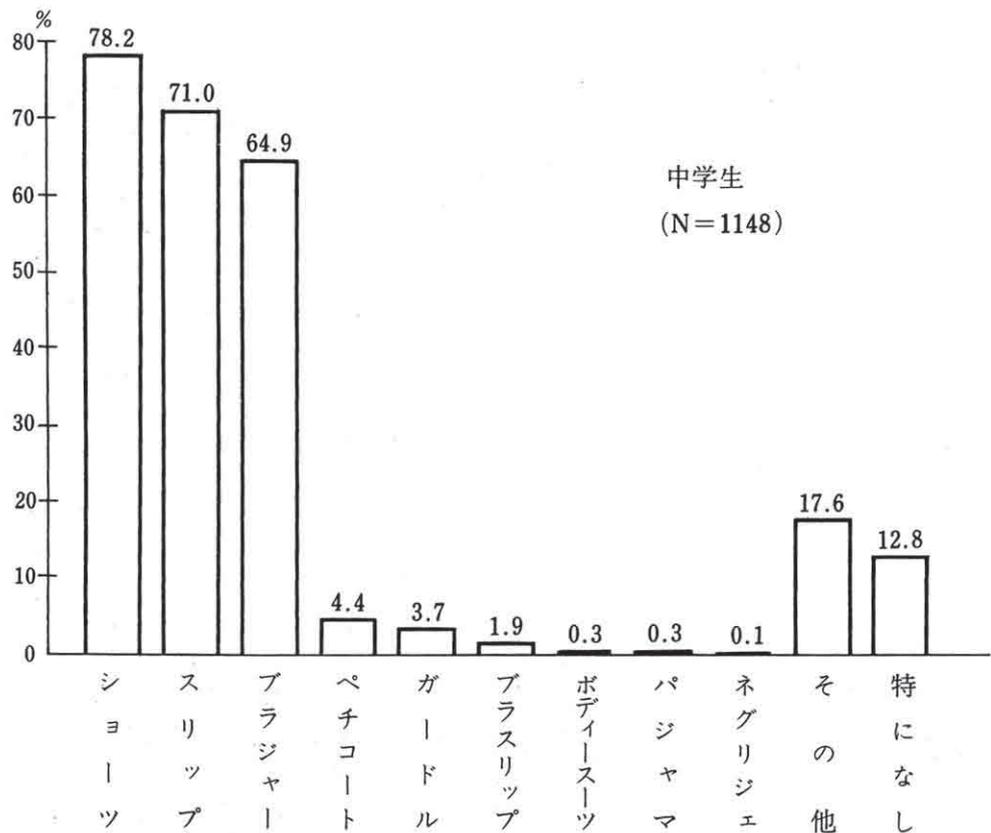
中学生にとっての下着とは、「ショーツ」、「スリップ」、「ブラジャー」

中学生に、「下着といったら、どんな下着を思いつくか」、思いつくままに3つあげてもらったところ、「ショーツ」(78.2%)、「スリップ」(71.0%)、「ブラジャー」(64.9%)が、群を抜いていました。

中学生にとっては、この3つの下着がもっとも身近な下着といえます。それと同時に、これらが下着との接触の第一歩になるわけです。

下着で思いつくものは、後に紹介する下着の所有率とも、深い関連性があることがわかります。

下着で思いつくもの



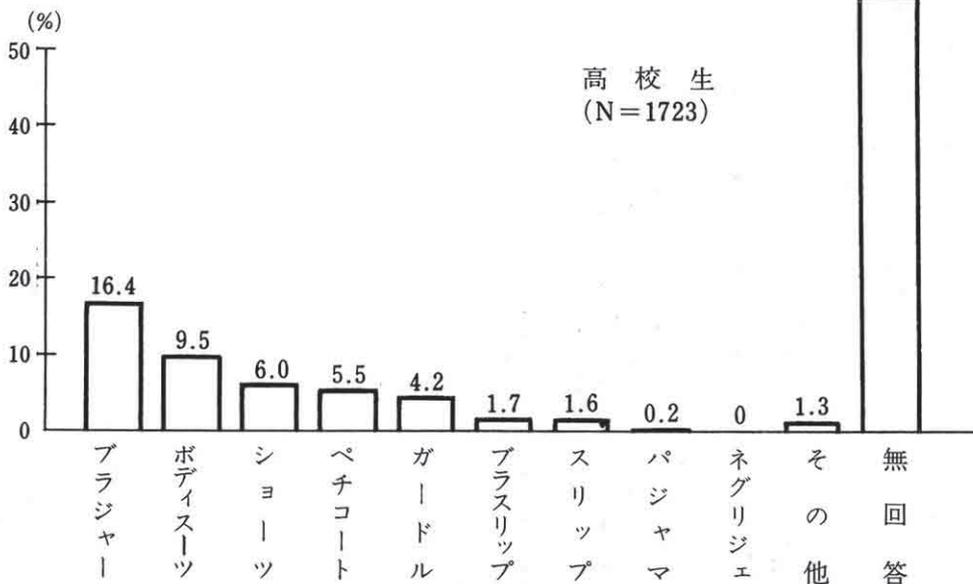
# 【16】関心のある下着

ブラジャーが、もっとも関心のある下着

高校生を対象に、「いま関心を持っている下着の名前」を、自由に記入してもらいました。あげられた下着では、「ブラジャー」(16.4%)が一番多く、以下「ボディースーツ」、「ペチコート」、「ガードル」でした。この調査では無回答者が、半数以上を占めてい

る点が注目されます。ところが17ページの調査によると、高校生ではとくに「おしゃれ」への関心が強いと出ています。下着の知識が稀薄なこと、その重要性が認識されていないことが、無回答者の多い原因の一つと考えられるでしょう。

関心のある下着



## ファンデーションとランジェリーの区別

ファンデーションとランジェリーの区別は、正しくなされているか、下着の知識の度合を調べるために、グループインタビューをおこないました。その結果は＜ファンデーションは、直接肌に触れるもので、ブラジャー、ショーツが該当し、ランジェリーは直接肌にふれないものでスリップ、ペチコートが該当する＞という回答を得ました。

大まかな区別はなされてはいるようですが、正しくはファンデーションは体型を整えるための下着であり、ランジェリーはそれ以外の下着の総称です。下着に関する知識は、まだまだ不十分な点も多いようで、それは、ボディースーツなどの下着のイメージがあいまいなことからも、うかがえます。

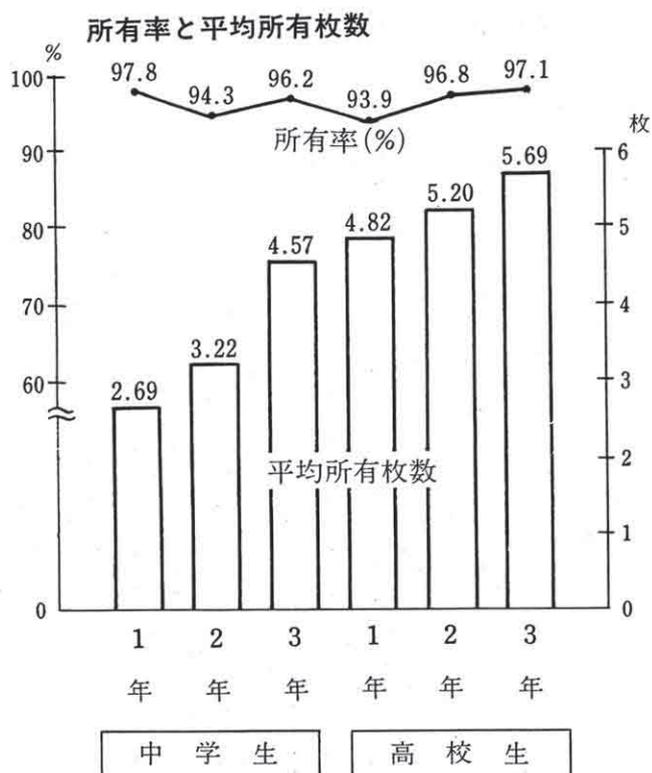
# 【17】下着の所有実態

ブラジャー、ショーツ、ペチコート、ブラスリップ、ガードル、ボディースーツは、年齢があがるとともに所有率・平均所有枚数がアップ。逆にダウンするのは、スリップとシャツ類。

ブラジャー、ショーツ、生理用ショーツ、スリップ、ブラスリップ、ペチコート、ボディースーツ、シャツ類の9種の下着について、その所有率や平均所有枚数を調べてみました。

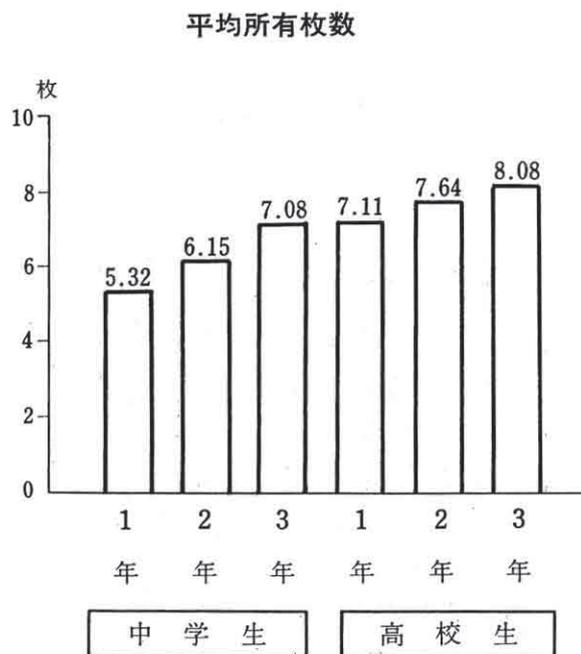
## ① ブラジャー

— 実際につけていなくても、持つだけは持っている下着。中1では、ほぼ全員が所有 —  
 所有率が、中1で97.8%と、非常に高い点が注目されます。21ページの「ブラジャーの着用率」と照合してみると、中1でブラジャーをつけている人は、27.8%。7割の人が、実際につけていなくても、持つだけは持っている計算になります。ブラジャーは、つけるつけないにかかわらず、中1の段階で、ほぼ全員が所有しているわけです。1人平均の所有枚数も、学年があがるとともに増え、高3では5.69枚と中1の2倍近い枚数を持っています。



## ② ショーツ

— 所有枚数は、中学1年で約5枚。高校3年で約8枚 —  
 ショーツの所有枚数は、学年があがるにつれて、少しずつ高くなっていきます。中1では約5枚、高3では約8枚という状況です。所有枚数が増加する原因の一つには「単なる必要な下着」から、「楽しむ下着」へと、ショーツのとらえ方が変わってくるのが考えられます。

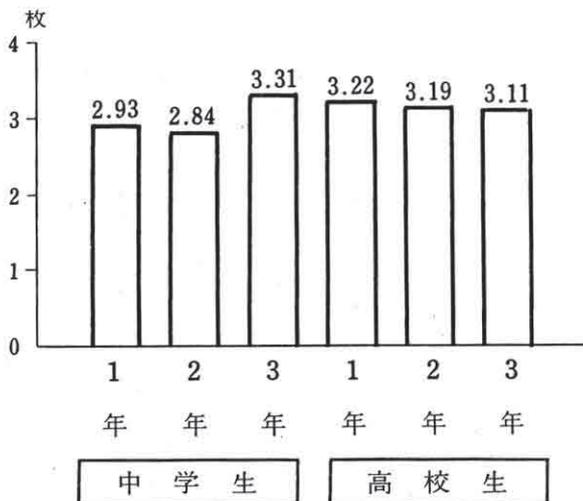


### ③ 生理用ショーツ

— 学年による平均所有枚数の差はなく、約3枚を所有 —

生理用ショーツの平均所有枚数では、学年による差がほとんど見られません。だいたい平均して、1人3枚を持っているということが、調査より明らかになっています。このことから、生理用ショーツは、3枚前後が必要にして、十分な所有枚数と推測できます。

平均所有枚数



### ④ スリッパ

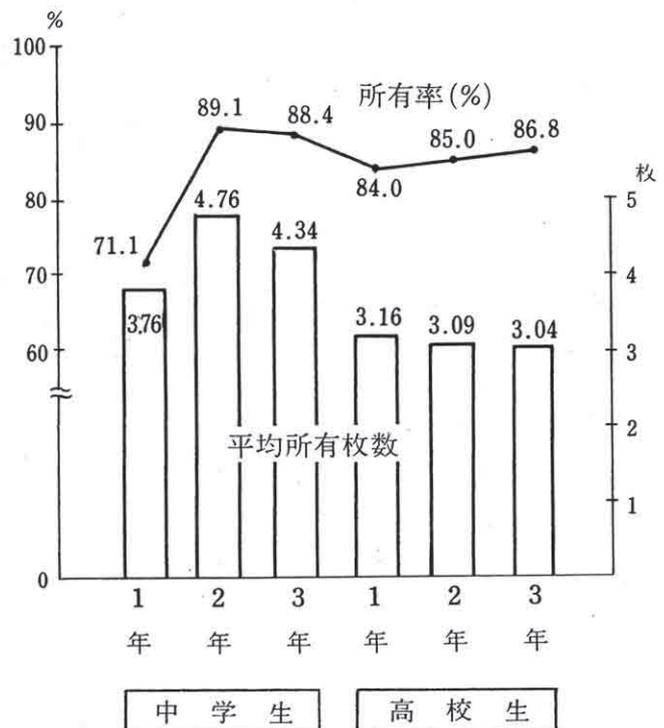
— 所有率は中2がピーク。平均所有枚数も高校生になるとダウンする —

スリッパの所有率は、中2でピーク(89.1%)を迎えているのが特徴です。

1人あたりの平均所有枚数も、同じく中2で、4.76枚ともっとも多く、高校生より中学生のほうが、所有枚数が多いという結果でした。

他の下着の所有枚数は、そのほとんどが、年齢とともに所有率・所有枚数が上昇しています。スリッパがその範疇に入らない理由は、スリッパ離れの現象が進行しているからでしょう。中3・高1にかけてが、その時期と考えられます。

所有率と平均所有枚数



〈スリッパに対する意識調査〉を、グループインタビューでおこなったところ、上の推論を裏付ける調査結果を得ました。

グループインタビューの調査報告では、

●中学時代は、先生や母親の指示に従い、半強制的にスリッパを着用しているが、高校生ではほとんどがスリッパを着用せず、ブラとショーツだけという下着の着用状態である。

●脱スリッパは、高校入学頃から、体育の時間に更衣室で、「あの子ども脱いでいる。私も……」というように、進行。急速に進む。

●脱スリッパを促す要因としては、(高校の年代は上半身に関心が集中しており) ブラジャーとスリッパの重なるゴロゴロした感じに強い拒否反応があることも、あげられる。

が、あがっています。

スリッパの正しい機能(アウトウェアのすべりをよくし、ファンデーションで整えたシルエットの仕上げをする。吸湿・保温の役割)が充分理解されておらず、スリッパにも、それぞれのアウトウェアにあった種類があること(例えばブラスリッパなど)が認識されていないことが、わかりました。

これは、中・高校生に、スリッパのイメージをたずねたところ、“大人用”、“フォーマル用”という解答が多かったことから、うかがい知れます。

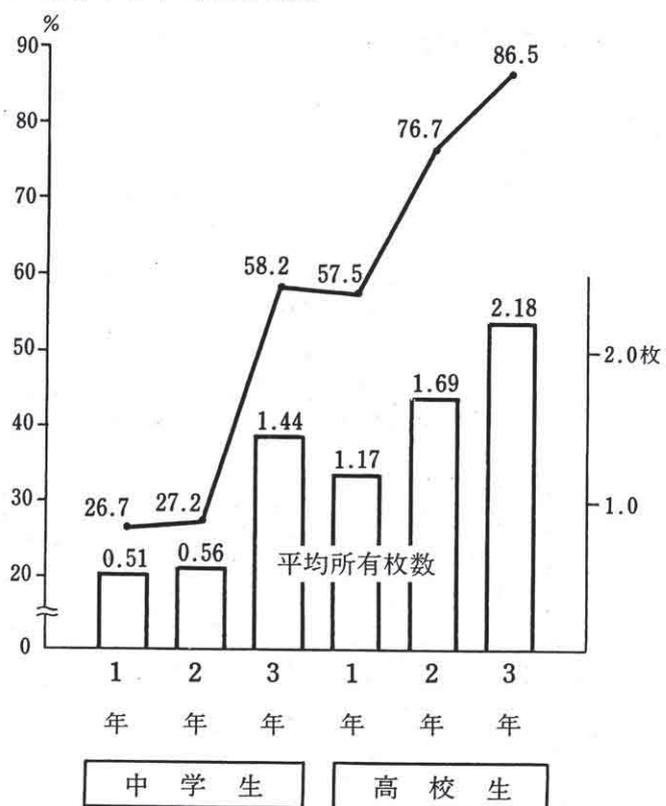
## ⑤ ペチコート

——所有率は中3で急増。高3では8割強が所有——

ペチコートの所有率は、中2までは3割以下と低いのですが、中3で58.2%に急増。高3では、86.5%にもなっています。ペチコートの所有率が急激に高くなっている時期が、スリッパ離れの時期(前述の『スリッパ』の項参照)と一致しています。このことから、スリッパにかわるものとして、ペチコートが、彼女たちの下着生活に登場していることが、推測されます。

1人あたりの平均所有枚数も、中2までは1枚以下ですが、中3で1.44枚。高3では2.18枚になります。

所有率と平均所有枚数



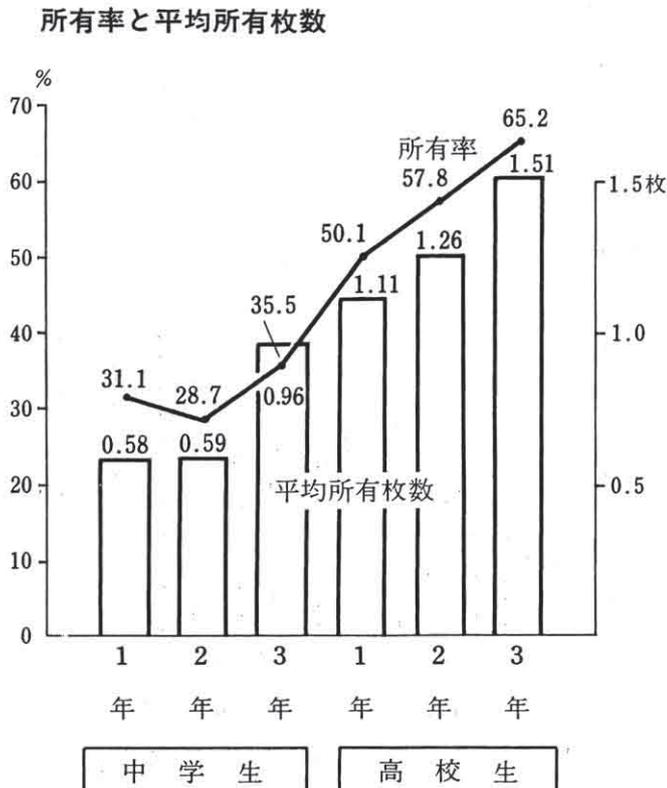
## ⑥ プラスリップ

— 高1では、約半数が所有 —

プラスリップの所有率は、中学生では低いのですが、高1になると、約半数が所有。その後も年々7%ずつ増え、高3では65.2%にものぼります。

1人あたりの平均所有枚数は、中学生では1枚以下。高校生では1枚強という結果でした。

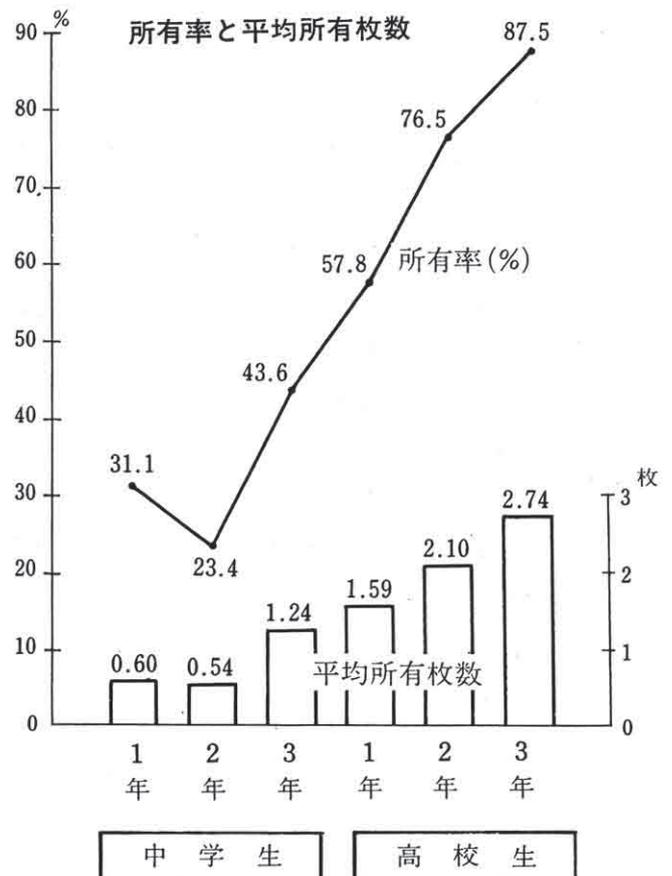
高校生になると、所有率・所有枚数ともわずかながらも着実にのびるのが、プラスリップのようです。



## ⑦ ガードル

— 中3から所有率が急激にアップ、所有枚数も徐々に増える —

ガードルの所有率は、中1・中2では3割前後にすぎませんが、中3から急増し、高3では87.5%。約9割の人が所有しています。これは19ページの『気になるからだの部分』で、年齢があがるとともに(ことに高校生になると)おなかやウエスト、ヒップが気になりだす、という結果とあわせて考えると、興味深いものがあります。平均所有枚数は、学年があがるとつれて増え、中1・中2では1枚に満たなかったのが、中3では1.24枚。高3では2.74枚と倍以上に増えていきます。



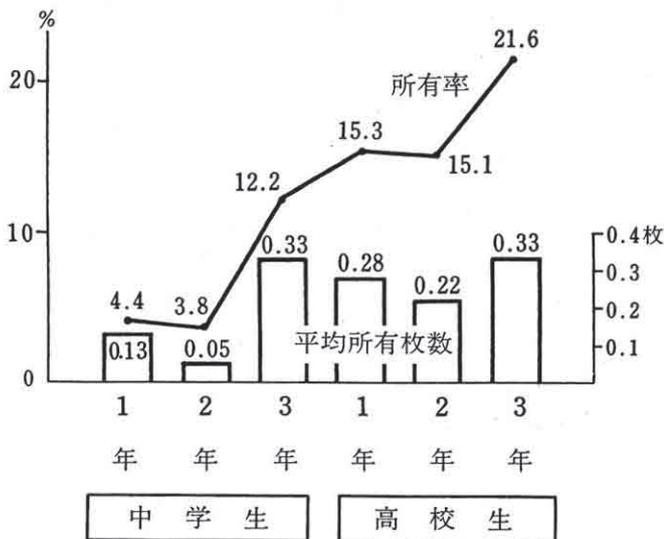
## ⑧ ボディースーツ

— 所有している人は少なく、高3でも5人に1人 —

ボディースーツの所有率は、ここでとりあげた9種類の下着の中でも、一番低いものでした。高3でも、約5人に1人が所有しているにとどまっています。

1人あたりの平均所有枚数も低く、各学年とも1枚以下です。

所有率と平均所有枚数



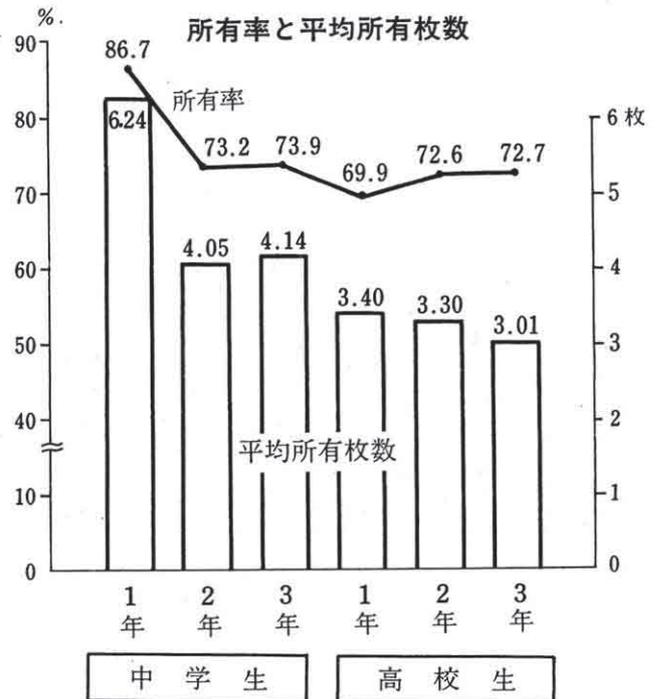
## ⑨ シャツ類

— 所有率は中1で最高。その後だんだん下降線をたどる —

シャツ類の所有率は、中1で86.7%ともっとも高く、学年があがるにつれて、徐々に下降していきます。1人あたりの平均所有枚数も、中1が6.24枚で最高。学年があがるにつれて減少していき、高3では3.01枚になっています。

“おしゃれ”に関心を持つようになるにつれて、脱シャツの現象が高まるといえましょう。

この中3から高校にかけての時期は、スリッパ離れがおこる時期でもあり、下着に関する限り、一つの曲り角といえます。



以上の調査をまとめてみると、

- ほとんどの人が持っているのが、ブラジャー、ショーツ、生理用ショーツ、スリッパ、シャツ類です。しかし、スリッパ、シャツ類に関しては、どちらかといえば学年があがるとともに、所有率は低下の傾向が見られるようです。
- ブラスリッパ、ペチコート、ガードル、ボディースーツといった、いわばローティーンになじみのうすい下着は、中3から高校にかけて、その所有率が急激にアップしています。

# 付録 母親調査

## 【調査概要】

- 調査対象 中・高校生女子を子供に持つ母親 282名
- 調査地域 東京・大阪
- 調査期間 昭和55年 4月
- 調査方式 アンケート方式

## 【調査分析内容の概要】

●着るものや髪型について、過半数の母親が娘に注意を与えている。「あまり注意しない」や「本人まかせ」という放任主義の母親は、1割強にすぎない。

●ところが、下着に関しては、規制はゆるやかで、「ふつう」や「気付いたことを話す程度」の人が6割強。「特にしつけをしていない」母親は、4人に1人もいる状態。

●母親の受けた下着教育も、厳しいものではない。ほぼ自分の受けた程度の教育を娘にも、という傾向がうかがわれ、下着教育に関しては進歩が見られない。

●下着に関する意見は、「キチンとした下着は身だしなみ」と考え、「子供の下着は実用本位」を選び、買うにあたって「子供とのトラブルはない」ようである。

●生理教育は、している人が半数。していない人が4割で、だいたい2分されている。生理教育をしている人に下着教育をしている人が多い。

●母親の情報収集の場として、PTAや同級生の母親との話しあいが考えられるが、そういう場で娘の服装や下着について話す人は、2割に満たない。しかし、厳しい下着教育をしている人ほど、「話す」割合は大きい。

# 【1】自由時間における娘の衣生活の規制

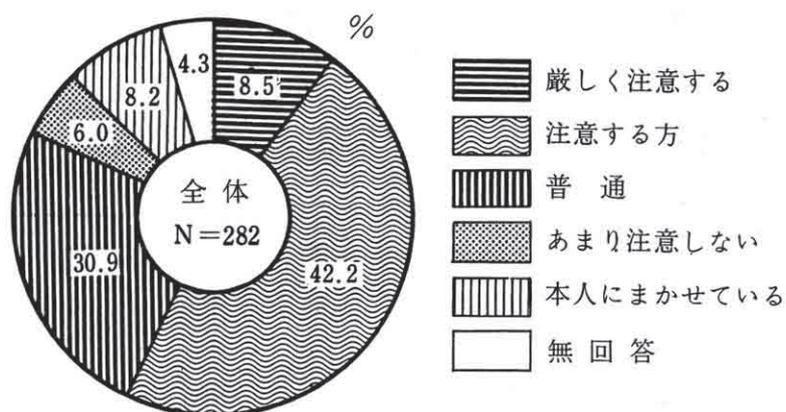
過半数が、娘の衣生活に注意を与えている。

母親は、娘に対して、着るものの形や色・髪型などをどの程度注意しているか——母親の娘の衣生活に対する規制状況を調査してみました。その結果、娘に対する規制は、どちらかといえば厳しいことが明らかになっています（「きびしく注意する」人は、8.5%で、「注意する方」と

いう人は42.2%。あわせて約半数が、娘の衣生活に強い関心を持ち、注意を与えている）。

また、「あまり注意しない」（6.6%）、「本人にまかせている」（8.2%）という、いわば放任主義ともいえる母親は1割強ありました。

母親からの注意



## 【2】母親の娘に対する下着教育

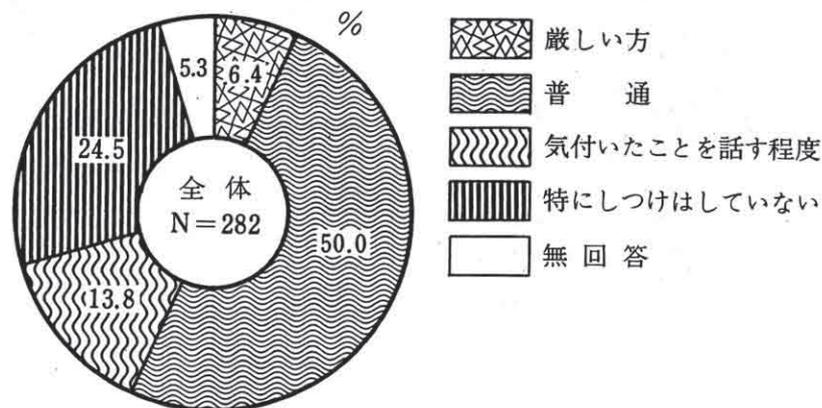
全体的に厳しくなく、しつけをしていない人は4人に1人

娘に対する下着教育の実際を調べてみました。「厳しい方」(6.2%)という人はごく一部で、「ふつう」、あるいは「気付いたことを話す程度」の人が6割強を占めます。また、4人に1人が「特にしつけをしていない」という回答でした。これは、28ページの、ティーン側からの意見とほぼ同じ調査結果で、家庭における下着教育が

ゆるやかで、厳しくないことをはっきり裏付けています。

前述の「自由時間における衣生活の規制」状況が、かなり厳しいものであったことを考えると、下着教育がなおざりにされていることを、指摘できます。

下着教育



### 【3】母親の受けた下着教育

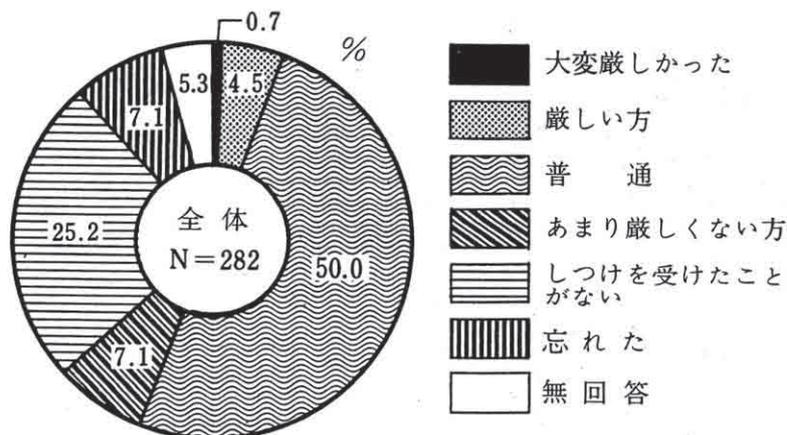
母親も、厳しい下着教育は受けていない。

それでは、母親の子供の頃受けた下着教育はどんなものであったのかを調べてみました。現在の子供たちと同様、母親の時代も、下着の教育は厳しくなかったようです。「ふつう」、あるいは「厳しくない方」という人が6割弱で、「とくにしつけを受けたことがない」母親が4人に1人でした。

こと子供に対する下着の教育には、あまり進歩もなく、自分の受けた程度の教育を子供にも、という傾向が読みとれます。

このことから、下着教育を押し進めるについては、母親に対する教育の場を持つことも重要であると考えられます。

母親の受けた下着教育



# 【4】下着に関する意見

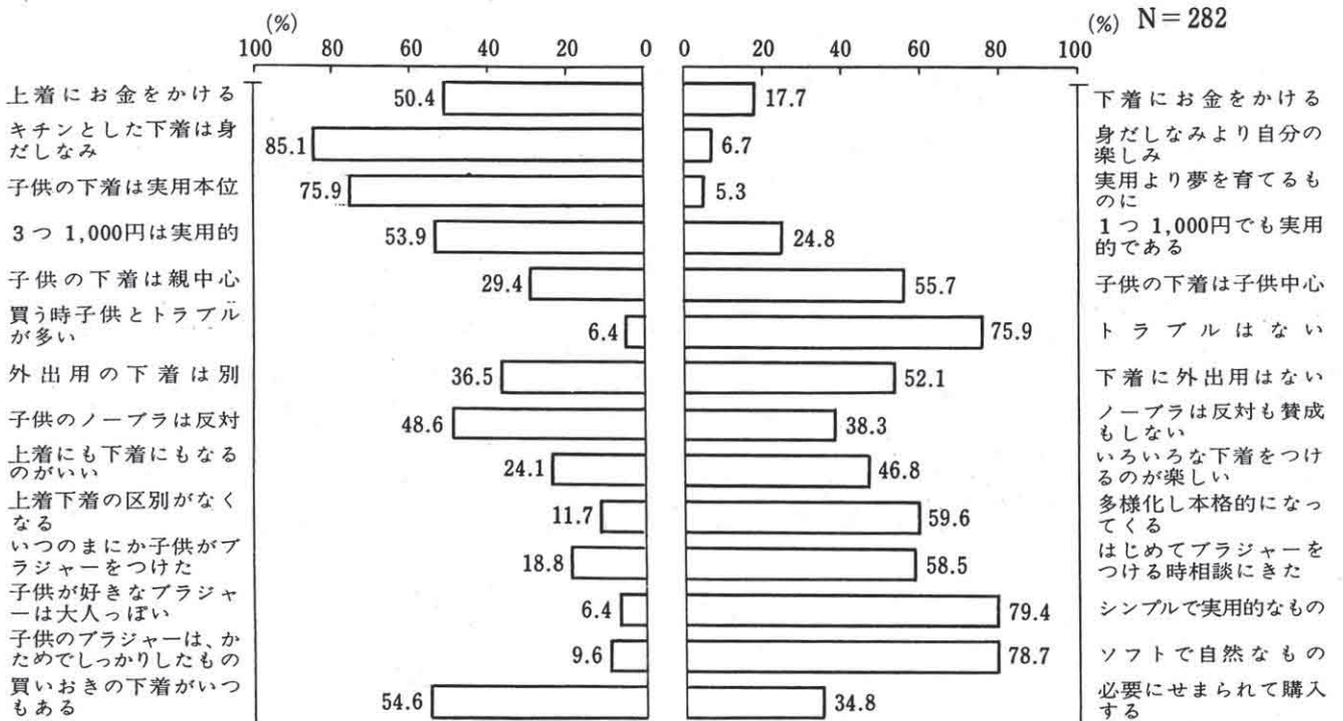
子供の下着は実用本位で、キチンとした下着は身だしなみと考える。

下着に関する母親の考えを調査した結果を簡単にまとめますと、

下着に対する考え方＝「キチンとした下着は

身だしなみ」(85.1%)であり、「子供の下着は実用本位」(75.9%)にしていることがわかります。

## 娘の下着に関する母親の意識



## 【5】生理教育の状況

生理教育をしている人は、半数。していない人は4割。

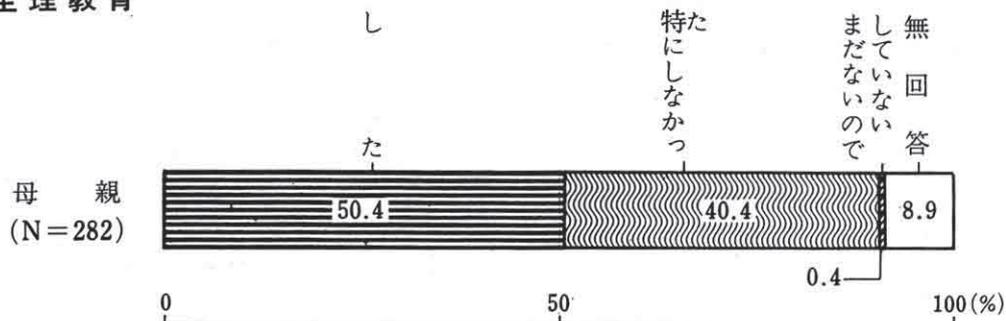
娘に対して、生理教育をしているか、いないか、など、生理教育の状況を調査しました。

「生理教育をした」母親は、2人に1人。学校や友人、あるいは雑誌などの情報にまかせているか、「特にしなかった」人は、5人に2人。ほぼ2分されることが、わかりました。

また、生理教育をした際に、ブラジャーやショーツなど下着のつけ方も一緒に「話した」人は、

68.3%いました（「話さなかった」人は、29.6%）。このことから、生理教育の場は下着教育という観点からも、重要な意味を持っていることがわかります。生理教育の今後の傾向（家庭においてなされるか、いなか）を考える中で、下着教育のあり方も検討される必要があると思われる。

生理教育



## 【6】母親の情報収集—PTAなどの話しあい—

娘の服装・下着のしつけについて、大半が「あまり話さない」

母親の下着教育の情報収集の場として、まず考えられるのは、PTAや同級生の母親との話しあいです。そこで、そういった場合、娘の服装や下着のしつけについて話しあうことがあるかどうかを、調べてみました。

「よく話す」、あるいは「たまに話す」という母親は2割弱と少なく、4人に3人は「あまり

話さない」か、「まったく話さない」という状況でした。母親たちの関心の低さを物語るものです。

また、娘に対する下着教育の厳しさからみると、厳しいしつけをしている母親ほど、「話す」という割合は高く、それなりの努力をしていることがうかがいしれます。

PTAなどの話し合い

